

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

第五十三卷 第一號

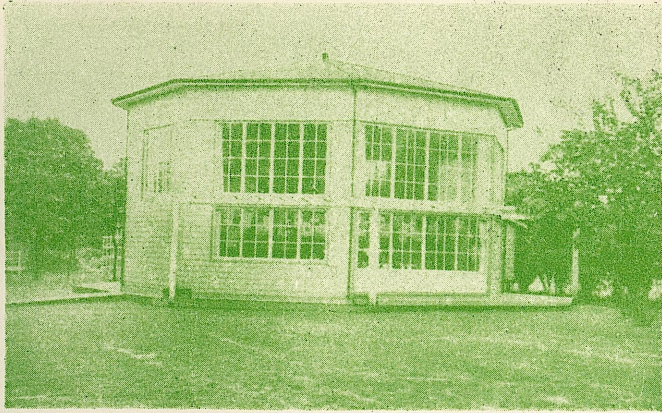


日本幼稚園協會

1

施 設 訪 問

— 愛 育 研 究 所 附 属 愛 育 幼 稚 園 —



↑ 幼 稚 園 前 景

↓ 階下で机を囲んでの工作

こゝは昭和二十八年六月に完成したものである。
園児・一〇〇名
先生・七名

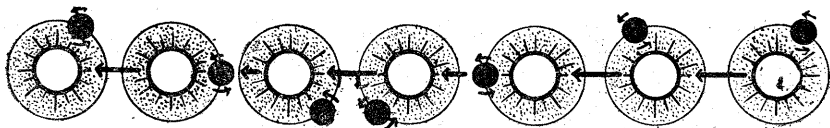
この幼稚園は、二階建、八角形という珍しい建方であり、柔かなクリム色の園舎は、木立ちの多いこゝ、麻布盛岡町の緑の中に明るい調和を示している。

内部の設備は、ことごとくに合理的に設計されてお



↑ 二階から一階に掛け渡された大きな滑り台

り八方の窓からさし込む日ざしも、遊び興ずる幼ない園児達の小さな肩先にあふれる。こゝを設計された半島義友先生にお聞きしたところ、二階の観察室からは、一階の丁度ホールのような保育室がのぞかれ、一方、下に遊ぶ園児達にはこゝをさえぎっている薄いカーテンと、網の掛つている奥で、保育観察に余念のない保姆先生の姿は見えないとのこと、つまり園児の最も自然な姿を鮮かにキャッチ出来るのである。その他に、知能の発達遅れた子供達の保育室があり、発達遅れた子供や性格異常の子供をどう教育したらよいかを研究しながら保育している。園児三十名、先生三名



幼児の教育 目次 第五十三巻 第一号

表紙……………猪熊絃一郎

巻頭言 家庭、保育所、幼稚園(一)……………倉橋惣三……………2

無 課 題 (ヌース)……………牛島義友……………4

アメリカの最近の幼児教育と

アメリカより歸りて

日本の幼児教育の課題……………津守真……………6

W・H・O主催

児童精神衛生会議に列席して……………平井信義……………16

シドニーより歸りて

平井信義……………16

年頭に あたつて……………山村きよ……………20

疳の強い子・落ちつきのない子……………広瀬興……………28

幼児の知能検査の問題……………村山貞雄……………33

★ 新しい保育者のために……………鈴木豊歳……………38

こ の 子 供 た ち……………イデーニス・ウオートン作……………43

フレールベル館の廿九年度新学期用品……………松原至大訳……………50

編 集 主 幹	倉 橋 惣 三	及 川 ふ み	齊 藤 文 雄
協 力 委 員	牛 島 義 友	波 多 野 完 治	山 下 俊 郎
編 集 委 員	多 田 鉄 浪	西 山 太郎	(五十音順)

発 行 日 本 幼 稚 園 協 会

家庭、保育所、幼稚園（一）

倉 橋 惣 三

家庭は幼児保育のものである。初めてであると共に、源である。源の完きを得ざれば末の完きを期し得ない。しかも人生のこと容易に完を望み得ない。これを補うに故意修飾を以てすれば、家庭生活の本然の尊さを害い易い。元来家庭は人間至情の生活の場である。意識の生活は屢々本然を破るに偏し易きがゆえであり、故意に傾くこと多きがためである。日常朝夕のうちに幼教を風化薰染するものが家庭の空気である。しかも、すべての親は君子聖者と限らない。況んや朝夕不用意の間に過誤失錯なしと限らない。故に、家庭に教育の理想郷を築することは難い。美より寧ろ、つくろいなきを以て家庭の真とし美とするか。朝に争い、夕に和し、時に乱し、時に悔。朝は子に弄戯、夕には親に測りことあり、雑然として、規矩をみだし、準継の整いを紊す。電話は必ずしも佳語を告げず、ラジオはましても俗調に謹厳をかきみだす。決して、君子の郷を以て居ないのである。しかも、美の中に、人間の家庭生活があり、人間の家庭の教育があるといえよう。少くも、その間に人間が養われるものと考え得られようか。但し、家庭教育のかく限界を言ひは、以て教育の心をゆるやかにする所以ではない。かゝるがゆえにこそ、家庭だけでは足りないといわれるのである。社会と國家との教育的責任が生ずるのである。

というのは、家庭の子を我子でないとはいききろうとするのではない。況や、幼児教育における家庭の位置を極少偏しようとするのではない。——教育はやはり教育意志の仕事だということを強調したいのである。誤りなき幼児教育は決して自然にできるものではない。いわば、細微の研究と用意とを以て、大乘のセンスに裏づけ、初めて過ちなきを得るものである。

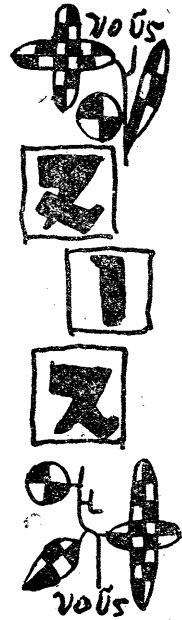
然らば家庭の教育的欠陥はどこから起るであらうか、貧がその一つである。両親の多忙がその二つである。親の病弱がその三である。両親の不和はその五にして最大になるものである。これらに比して、外的理由であるが、環境殊に住居、家業の種類、——挙げてゆけば多いが、親の精神動揺はその最大にして最深きものである、と共に更に親の神経過敏、殊に教育的過敏も侮るべからざるものがある。つまり教育的意識の過渡である。

然れども、家庭の弊が如何に多くある場合にしても、無家庭の如く憂うべきはない。親の愛はすべてを覆う。親の愛なければ、万の好条件ありと雖も、恐らく無家庭にひとしい。僅に細部の欠陥を補い、些か親の愛を補うものに社会的児童福祉施設ある。謂うところの保育所（託児所）及幼稚園がそれである。その始めと發達はいろ／＼であるがその心は一つである。

保育所、その起源は国によつていろ／＼である。その一つは母の貧窮と過勞とから、母乳育の不足を補う目的を以て牛乳の供給をすることがその初めであつた。その為、廉価にして純良なミルクブランドの増設が社会的に（國家的）に企てられた。またイギリスにおいては、特に病弱なる母子の保護が企てられその施設が、チームス上流に建てられた。特にその為のセトルメントはその著しいものであつた。又ヴィクトリア女王の特志によつて設けられた、ヴィクトリアハウスは最完備せるものであつた。即ち初期の託児所は主として栄養保護が主目的であつた。即ち育児保護であつたのである。

その後社会的児童保護事業の發達と共に、次第にその対象をを加え、單に哺育の時期のみならず教育の年頃に及んだ。あらゆる年令にそれにふさわしい教育の必要はいうまでもない。とくに哺育の場合單純でないだけである。

殊に極貧家庭の子らの場合には、その成熟の早きと啓り時間とから、その教育的望外は普通家庭の子よりも複雑になる。教育的望外の必要な所以である。殊にそやういふ環境のように教育的細心の必要は多い。不良少年問題に憂慮する人々の早くから憂慮するところである。即ち育児問題において幼児期と乳児期とを區別することの困難なる所以である。



無課題

牛島義友

何でもよいから何か書いてほしいという注文ほど人を悩ますものはなからう。子供が何か頂戴と言うとお母さんは棚からお八つを出して下さるが、こんな調子で何か書いて下さいとたのめば即座に何か出てくれば編集者も執筆者もさぞらかな事である。ところが、この何か書いてと言われた時ほど苦しい事はない。平素いかに蘊蓄している賢者だとて、さて何かと言われるとまごつかれるに違いない。このヌース欄は賢者の言を拝聴さしてもらふ欄かもしれないが、題がなくてはいかなる賢者もたわ言をのべるしか出来なからう。

口の重い人だつて人から問を發せられたら何か答えるに違いない。發表さすためには問が必要である。自分の心の中に問題が發生すれば、それを解決せんとの意欲が起り、大論文でも大創作でも生れてこよう。しかしそれよりも手つとり早い自己表

現は相手から直接質問され、問題を投げかけられる事である。子供達の学習がこの形で展開するのが一番簡単ではなからうか。教育でも古い形には問答形式によるカテキズムが行われていた。教師が一人で組織的な講議をし、学生がたゞノートをとるといふものよりも古い問答形式の方がはるかにすぐれた教授法であった。プラトンの哲学はこのような対話形式で思想が展開しているし、今日の学校に於ける討議法に於いても問答形式が基礎となっている。

又、今日問題解決の学習が教育に於いても特に重要視されている。即ち、過去の記憶的な学習、即ち生活に必要な原理や基礎知識を暗記さすやり方よりも、人が生活をしている間にそゝ遇する問題といきなりとりくみ、それを如何に解決さすかと努力さす学習の方がはるかに大切だといわれている。このような場合に第一に必要な条件は子供が問題を持っているということである。その問題は教師から課題として投げられる事もあるし、自分が生活や思索をつづけているうちに問題として感ずる場合もある。とに角問題意識がなければ解決活動も自己表現もはじまらない。

ところがこの頃は無課題の保育や教育がはやっているとらしい。自由遊びにもその傾向が強いし、描画の場合に絶休に課題を与えてはいけなないと主張する人もあるらしい。しかし課題のない単なる子供の遊びが保育といえるだろうか。これという目標も計画もなく、たゞぶら／＼と時間を過す——これは多くの

大人の人の過す遊び方であり、一服吸う時の雑談の形式であるのが保育の中心だとしたらとんでもない話であろう。小学校ならば一定の授業時間があるから中間の休憩時間はこのようなぶらぶら、ぐずぐずで時間を過してもよろしい。しかし幼稚園の自由遊びはそんなものではないはずで、幸い幼児の遊びにはもっと積極的に作り出す力、表現したいとする意欲があふれているので、特にお節介しなくても創造的な活動を展開してくれる。しかしこの場合、子供自身の中にその時その時の課題をもつており、その解決としてのトンネル掘りや、自動車ごっこが行われているのである。

課題がなくては積極的な行動がはじまらないが、この課題から解決までに余りに性急であってはいけない。教師の質問に応じて答える場合は問と答の間に時間的余裕がなく、生徒はたゞ自分の知っていたことを答えるだけである。単なる記憶の再現であり、新しいものを生み出す学習にはならない、課題によって自ら考え、新しい解決を発見するためには——そして又これが本当の問題解決である——時間的余裕が必要である。作文を書かず場合に時間のはじめに題を出してその時間内に書かずよりも、一週間前に題を出しておいて次の作文の時間にか、した方が遙かによい作文ができる。子供はこの一週間で、その作文の課題だけを考えつづけているわけではなく、否、殆ど忘れていくかもしれないが、はじめに課題を出されると、それからの一週間の生活経験が何らかの形でその課題と結びつき、作

文を作るのに必要ないろ／＼な着想や資料が集積されるのである。

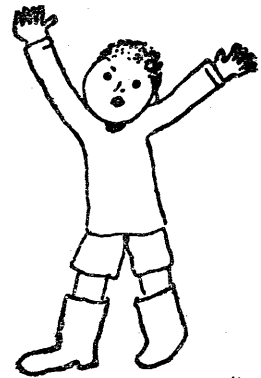
画を描くにしてもいきなり課題が出されると、どうしても概念的な画で答える傾向になる。これを画にしようという。モチーフがあり、それについていろ／＼な想を練り技術を研究する事によつてよい画が出来上ってくる。即ち、真の問題解決や自己表現や創造的活動を促すためには、性急な課題の出し方ではいけない。否、課題も人からあびせかけられたものでは本当に自分の問題という意識が不充份であつて、出来れば自分の生活の中からわいてきた問題である事が望ましい。この問題が困難であればあるほど大きな解決活動が展開するであろう。

幼児の生活で自発的な創作活動を重要視する事は大切であるが、その結果課題の存在を忘れて了うのは大きな間違いである。課題があつてはじめて真の学習活動、教育がある。たゞ子供を遊ばせておけばよい、子供の中から生れてくるものをたゞ待つていればよいのだというのでは保育とはいえない。わざわざ幼稚園や学校にやつて来ているのであるから如何にして早く効果の多い学習活動や創造活動が生れるかを工夫してやる必要がある。

× × × × × × × ×

アメリカの最近の幼児教育と

日本の幼児教育の課題



津 守 眞

私は、こゝでアメリカの最近の幼児教育のことを考えるに当って先づ私が二年間学んでいたミネソタ大学の児童研究所の附属幼稚園とナースリースクールのことを取り上げ、それから此の大学の所在する市、ミネアポリス市の各種の幼稚園に目を通し、それから家庭における子供の日常生活を観察して、日本の幼児の問題と比較し、両者の問題の相異の根本となつてゐる社会の相違を考察し、日本の幼児教育を一層進めるために、考察の一助として供したいと思ふ。

ミネソタ大学児童研究所附属幼稚園及びナースリースクール 此の幼稚園は、此の三十年來、アメリカにおける幼児教育界の新教來運動の牙城をなして來たところである。アメリカにも多くはない大学附属の児童研究所に附属した幼稚園としてアメリカにおける幼児教育の指導的役割を果たしてきたし、又こゝで養成された幼稚園の先生は全国に数多く散らばつてゐる。校長はジョセフィン・フォスター (Josephine Foster) という女の人で、一九二五年に創立以來

校長をしてきたが数年前亡くなった。ジョセフィン・フォスターは幼稚園教育において古典的な価値を持つた名著を数冊著し、今尚幼稚園の先生になる人には必読の書物となつてゐる。(註一) フォスターの死後、ドクター・エリザベス・メチャム・フラウ (Elizabeth Meahan Fuller) が跡をついで幼稚園及びナースリースクールの校長をし、又大学の教授を兼任してゐる。校長の下に幼稚園、ナースリースクール各々主任保姆があり、何れも創立以來主任保姆をしてゐる。此処は大学の附属なので実習の学生や研究のために入りこむ学生が突に多い。ナースリースクールの二才児の部屋などには壁際にぎろしりと大人が立ち並ぶ位のものもある。しかし不思議なことに、そうゆう大人が割に邪魔にならない。研究或いは見学のために参観したい時は、校長の秘書に断わると、参観の注意書を書してくれる。それには、子供に話しかけない事、とか出来るだけ立たないで腰をかけて壁際に坐るようにとか書いてある。皆これを守るから静肅であるし、子供も余り気にしない。

さて、此処でいくつか日本の幼稚園との印象の相違を挙げてみよう。私が此の大学に来た当初、私は幼稚園がどこにあるのか気が付かなかつた。しばらくして私は、私共のいつもいる研究室と同じ建物の中に、それも玄関を入れて直ぐの部屋に幼稚園があることを知って驚いたのである。きつちりと閉じた扉と壁は、幼稚園を一切の外界から隔絶して、幼稚園だけの世界を作ってしまった。庭に出る所も、日本の幼稚園の様に開放してはなくて、明るい窓はあるけれどもすつかり壁に包まれて狭い出入口が一つあるだけである。幼稚園のみならずすべての家屋が、こうゆう風に外界としまっている所

は欧米的生活様式と、日本の生活様式との違う所である。夏になると日本では窓も襦子も開けひろげて風を通して涼しくするがアメリカでは逆である。窓も襦子もきつちりしめて、黒いカーテンをおろして陽をさえぎって部屋の中を涼しくしようとする。つまり、自然との關係が薄く生活と四季との關係が少い。幼稚園の保育案でも自然の変化をとり入れた遊びが少く、その点日本は豊かな自然が保育の内容にも盛り込まれているのを感じた。もう一つの印象は先生が大変静かで子供達が秩序正しく、騒がないことである。よく日本の子供達はこんなふうにさくさくないだろうと尋ねられたものだったが、私にはかえってアメリカの子供達が静かで、秩序がある様に思われた。そして又、先生の存在が目立たない。これは幼稚園教育でいつも強調される事であるが、先生は決して表面に出ないで、子供の活動を助けながら、子供をリードしてゆくという事がうまくいっているのである。先生の声が大きく保育室に響くというようなことは殆ど見かけなかったことである。

いろいろの幼稚園

さて、大学附属の幼稚園は、いろいろの点で特殊な幼稚園である。研究者、実習生を多くもち、手が行き届き、子供も教育ある家庭教育に特に熱心な家庭から来ているものが多い。そこで目を転じてミネアポリス市の各種の幼稚園を見ることは、アメリカの幼稚園界の一つの断面を見ることもなろう。

公立幼稚園

日本では公立幼稚園が少く、全国幼稚園の約六〇%が私立であるのに対し、アメリカでは今世紀の始めより、私立幼稚園は急激に公立幼稚園に吸収されてしまった。そして現在では、全国幼稚園の約八〇%が公立小学校に附置された幼稚園であり、ミネアポリス市の八十二の公立小学校の殆ど全てが一つか二つの幼稚園のクラスを持っている。公立小学校は貧困な地域にも裕福な地域にも等しく分布しているから、いろいろの階級の子供が安い費用で公立小学校の幼稚園にゆくことが出来る。私は一日、一番貧困な地域の小学校、アダムス、スクールの幼稚園を訪れてみた。子め、最も貧困な地域だから、と注意されていたのであるが、幼稚園の子供の印象は、全く他の地域と変わらず、子供達は明るく嬉々として遊んでいた。公立小学校に附置された幼稚園は、どうしても小学校の子供と同様の取扱いを受けがちである。教室は小学校の他のクラスと隣合って、造作も同じである。たゞ机と椅子が小さく、机が仕事台のように並べられて、人形のおうちなどが部屋の隅にとりつけられてあるだけの違いで、校庭も他の子供と共通である。こうゆうと大変

小学校的な幼稚園の様に思われるかもしれないが、又現に先生によつては、より小学校に近く、或いは、よりナースリースクールに近く指導しているけれども、概して所謂小学校的な感じは受けない。というのは、アメリカでは、幼稚園から小学校の二年までは、初等科として、大体教育の様式も、似ているし、又先生の方も共通することが出来るのである。幼稚園の先生の免状というのはなく、初等科の先生の免状が下りるわけである。それだから幼稚園が小学校に似ているとも云えるし、又小学校が幼稚園に似ているのだとも云える。私が滞在していたころ、丁度日本から子供をつれて滞在に來られた方があり、その子供が小学校の一年に編入されたが、アメリカの小学校は、まるで幼稚園みただ、と云っていたのは、此の間の事情を語るものだろう。序でながら、アメリカでは大がいの幼稚園は午前と午後と二部制で、先生は一日に二クラス教えることになる。

宗教幼稚園 ミネアポリス市には、三百二十五のキリスト教会があり、その中のいくつかが、幼稚園を持っている。私は或る時、ドクター・フラーから是非見てくるように、と云われて、アセンションスクールというカトリック系の小中学校に附属している幼稚園を見に行った。此処では、室内のしつらえなど、丁度日本の幼稚園と同じような感じで、子供達は実に楽しそうに、それぞれの仕事をしていた。足の悪いかなりの年の尼さんが先生で、悪い足をひきずりながら、あちこちと歩いて子供をみていた。こゝでも、子供達は静かで、先生の声も殆どきこえず、それでいてよく見ると子供達は樂

しそうに明るく仕事をしているのである。此処の尼さんの先生は、近年アメリカの子供達は、たゞ動き廻ること、そして刺戟を受けることばかりしか知らないから自分で創造する力を養いたいのだと私に語っていた。音楽指導で子供にレコードを聞かせて、数人づつ中央に出して自由な、ふりつけをして子供の舞踊を指導していた。それは実に創造的でしかも微妙な興味深いものだった。

私立幼稚園 ミネアポリス市には、宗教以外の私立の学校が少なく、私立の幼稚園は数える程しかない。その中で有名な、ノースロップ・コーリジマムという女子の小中高等学校に附属した幼稚園を見学した。此の学校は特に富裕な家庭が多く、子供達のみなりは特にきちんとしていた。先生は昨年大学を出たばかりの若い人で、まだよく馴れず、子供の扱い方もぎこちなく、従つて、何となしに、全体の落着きの欠けた感じがしたのである。

さて、ドクター・フラーは私にいろいろの種類の幼稚園を見学する機会を与えてくれたのであるが、私は全体を通じて、やはり幼稚園で一番大切な要素は、先生であることを強く感じたのである。あの幼稚園、此の幼稚園といろいろ思い浮かべてみると、子供達が樂しそうに力一杯仕事をしている所もあるし又それ程でもない所もあるが、それが皆先生の態度とか人柄に関係しているように思われるのである。ドクター・フラーとこんな話をした後もう一つ見に行った幼稚園があった。それはヘイススクールという公立小学校に附属した幼稚園だった。比較的中心地に近く、半商店街、半住宅という地域である。こゝは公立学校に附置されているが、普通の教室とは形を

変えて、広い遊戯室に二室小さな室がついたような形にしてある。

子供達は広い遊戯室にあちらに一組こちらに一組と、或いは積木をしたり、或いは絵の具で絵をかいているグループと散らばっている。自然に分れたグループの中に、先生が適当にはいつていつて、活動を盛んにしている。お話の時間には皆一ヶ所に集めるのだけれども先生が静かな声で、さあお片付けをしましょう、と一言云った。けれど、子供達は皆、それぞれものを片付けて、静かに集まり、すへてが波の動くようによどみなく遊ぶのである。けれども又、その裏の先生の心づかいは誠に細かいものである事は、すぐに察せられた。その時に出して置いてよい材料とならない材料とを巧みに使いわけ、そして絶えず子供の上に心を配っていることは、大らかな静かさの中にも見出された。後に聞いたのであるが、この学校は八〇%がユダヤ人であり先生はユダヤ人ではない人が多く、此の先生もユダヤ人ではないのだが父兄達から大へん尊敬されているのだという事を知り、やはりそれだけの事はあると思つたのである。こういう学校では、えてして、人の間の葛藤が起り易い。けれども校長は極めてはっきりと、学校の中には宗教の差を持ち込まず、人間としての扱いをすることを方針として、父兄もこの線を守って、うまくやっている。此の学校の心づかいは先生の人格とがあつて、此の幼稚園が出来ているのだと思つた。この幼稚園には、常時ミネソタ大学の幼稚園から実習生を送っている。(註二)

(註一) Foster, J. C. and Mattson, M. I.: Nursery School

of Education, D. Appleton Century, N. Y. 1939
Foster, J. C. and Headley, E. H.: Education in the

Kindergarten, American Book Company, 1936. 2nd

rev. Ed. 1948

(註二) アメリカの幼稚園の現況について最もよく書かれている

書物は、

National Society for the study of Education,

Forty-Sixth Yearbook Part II, Early Childhood Education, 1947

社会と家庭と子供

子供のための教育施設は子供を作るに大切であるけれども、子供を作つてゆくのに、もっと根本的なものは、実は家庭であり、更にその底にある社会なのである。日本人と欧米人とは随分違ふし、又日本の子供とアメリカの子供とも違ふ。その違いを作っているのは家庭の違いであり、社会の違いであり、文化、伝統、風習の違いである。そこでアメリカの子供と、家庭及び社会のことを考察してみよう。

親は子供を個人として、社会の一員としてみてゐる 当り前の

ことのようにであるが、子供は生れた時から既に、独立した個人であり、自分と同等の社会の一員であるという考えは、日本とくらべるとずい分強いように思われる。それが生活の端々に現われる。例えば子供は事情の許す限り、身分一人の専用の部屋を持ち、どんな小さな子でも自分のベットに寝て、自分の品物を好きな様に置いて、自分の勝手になる部屋を一つ持つという事は、ぜいたくでもないし

稀なことでもない。それは当然の常識である。勿論そういうことをしてやれるのは経済的に豊かだということもあろうが、随分貧乏な家庭でも、子供に自分の部屋を与えるということは親の責任だと考えているようである。日本では随分経済的に余裕があっても、子供の一人一人に自分の部屋を与えるということはなかなかないだろう。このことだけでも子供の生活に大きな影響を与える。お誕生の頃には子供は大きい自分の部屋でねかされる。二つ三つになって物心がつく頃には、子供は自分の部屋でねるものと自分できめているし、自分の部屋の中では何でも自分の自由に出来るのだということを知っている。自分の部屋の外では嫌なことがあっても、うるさいことがあっても、それは自分の部屋から出ている間のことであって部屋に入ればそれは自分の世界である。子供もそう思っているし、親もそう思っている。それでは子供は自由な人格を持った個人だから、親が干渉しないで勝手にさせておくかという、なかなかさうではない。子供の躰は或る面で非常に脆い。食事の時の礼儀作法、公園や道路をきれいにしておくこと、人に不快を与えないように気を配ることなど、なかなか嚴重にしつけるのである。親は子供を社会の一員として社会に参加出来るように育てる義務を持っているというように考える。それはたゞ単に将来社会に出て食ってゆけるように、というのではなくて、社会の一員として社会に尽してゆけるように、ということなのである。

社会は子供を社会の一員としてみる 家庭が子供を社会の一員としてみると同様に、社会も亦、子供とそれぞれの家の子供として見

るよりも、社会の一員として見る。それで、学校や幼稚園から帰ってからの子供の活動のための社会施設には特に気が配られている。例えば、子供の遊び場としての公園は、ミネアポリス市にだけでも百四十一あり、(人口一人当り一エーカー以上)夏休には公園に指導員がついて、公園の子供の遊びを指導するのである。これには大学で児童教育のことを専攻した人が当り、又大学生が夏休みのアルバイトに喜んでやる仕事である。夏休になると、大きな公園では、子供達を動員して人形芝居を作ることや、水泳の講習といういろいろなことが専門の指導員の下に始まるのである。これも多くの公園を作るだけの土地の余裕があるからでもあるが、やはりそれだけの問題ではないと思う。

近年は特に、子供を社会の手で教育するという傾向が強くなって来た。子供は大きくなるにつれて参加出来る社会集団が増して行く。学校、幼稚園も家庭外の教育機関の一つであるが、それだけでなく、ボイスカウト、ガールスカウトの活動に活潑で、非常に多くの子供達がこれに参加していろいろの計画を持っているし、又それより更に下の年令の子供達にはカプスカウトの活動が盛である。私の知っている或る家の幼稚園に行っている子供はカプスカウトに属していたが、その母親は毎週十数人の子供達を自分の家に集めて、いろいろの計画を持っていた。更に又方々の教会で互に相競って子供達のための計画をするので、子供達は学校から帰っても、家外の社会活動をする時間が大変増えてきている。勿論、幼稚園の年令ではまだそれ程でもないが、小学校から中学校、高等学校に行くにつれて、日本の子供と比してその社会活動はずっと活潑である。

ミネソタ大学の児童研究所の教授、ミルドレッド・テンプリン (Mildred Templin) が最近子供の遊びの調査をして、これを二十年前のものと比較しているが、それによると、子供達の組織化された社会活動、即ち、ボーイスカウトや日曜学校の計画などに参加して費す時間が最近著しく多くなっており、逆に組織化されない子供達の遊びは減少している。此の研究事實は前述の事柄を裏付けするものであろう。

さて、子供が社会の一員としての訓練を受けるために、家庭外の世界に子供を出す傾向が著しくなると、子供達が家庭の外で費す時間が、非常に多くなり、それが又近年は家庭の悩みの一つになつてきている。子供は家庭が教育するものだろうか、それとも社会が教育するものだろうか、という議論が度々なされる。子供が子供達の会合に出て夕食をしたり、友人の家に招かれたり、又友人を招んだりするのは良いことだが、こう始終では家庭の中の落着いた団樂が保てないじゃないかというのが家庭中心主義の父親の声である。年老った人々は云う。我々の時代には、毎日食事の席で親子揃って食前の祈を捧げて団樂し、夜は燠炉を囲んで静かに話し合ひのうがしきたりだったのに、近頃の子供達は、どこかの会合から夕食の直前にとびこんで来て、食事がすむや否や、又別の会合にとび出してしまふ。これでは家庭の影響など子供に与えられないではないかと。日本の社会では、もっと子供達に社会的活動の機会を与えることが必要であるけれども、その際に、家庭の立場を考えて計画をする必要である。

社会は子供と、人間の生命を大切にする。社会が子供に対して払う心遣いの一つは、道路から子供の生命を守ることである。アメリカの市では、警官を見ることは非常に少なく、朝警官を見るのは大がいの学校のわきである。学校のそばの子供の横断する辻々は、巡査が立って子供を渡してくれる。自動車は学校の側では必ず徐行して走るし、電車やバスが止った時には、必ず出入口の手前で停車して、電車やバスが走り出すまで待つ。これは州の法律で定められていることであり、朝夕のどんな混雑時にも嚴格に守られる。日本の道路の狭い上に又大きな自動車、家の軒先をすれすれに全速力でふつとばし、軒先に遊んでいる子供など吹き飛ばされそうに見える。自動車は電車が止った時でもお構いなしに、同じ速力で電車にすれすれに疾走する。これは亦何という対照であらうか。

子供達が一日の勉強と遊びに疲れて夕陽が迫る頃。ミネアポリスの市ではサイレンを鳴らす。子供達に家に帰れという合図である。九時以後に一人で表に出ている十六才以下の子供は、お巡りさんがみついたら家まで送り届けなければならぬ。そして多くの子供達は、家に帰れば温い両親の手と、自分のベットが待っている。手足を洗って、父母におやすみなさいのキスをして、めいめい自分の部屋に入ってベットにもぐりこむと、家の中はひっそりとするのである。

社会の相異

幼児の教育のことを考えて、私は人間の住んでいる地盤としての

社会を考えざるを得ない。幼児教育に携わるものも、幼児も、両親も、皆共通の社会の上に住んでいるから、それらすべてが、その地盤としての社会の制約を受けている。日本の幼児教育とアメリカの幼児教育とを比較して考える時に、私には個々の相異点よりも、社会全体としての相異がすべてに反映しているように思えてならないのである。そこで、日本の社会とアメリカの社会の極立った対照をなす特徴を挙げて論じてみようと思う。

安定した社会　日本は古い国だと云い、アメリカは新しい国だという。いかにも創立以来の年数を比較すれば、アメリカはお話にならない程新しい国である。況してアメリカの中北部の都市、ミネアポリスと云えば、まだ創立以来百年にしかならない。古い都市東京に住む私共は、これは実に新しい市であると思う。所が現在の家の年の数を見ると、百年の歴史しか持たないミネアポリスで、七十年八十年を経た一般家は珍らしくなく、建築してから三十年という家は決して古い方ではない。東京では戦前でも三十年前に建った家と云えば、新しい家ではなかった。況して戦災で三分の二も焼失して多くの家が戦後始めて建った現在、一体どちらの市がより古いと云えるだろうか。家のみでなくいろいろのことで同様の比較が出来る。例えば五十年前の文章は日本ではずい分違ふ。況して百年前と云えば少し国語学の素養がなければ理解し難いような文章が多い。手紙でも、書物でも。所が英語の文章の場合には、勿論いくらかの変遷はあるけれども、五十年前の文章体は、小説でも手紙でも、役所の公文書でも現代と殆ど同じ体裁である。五十年どころ

か、百年、二百年、それ以上前の文章でも、現代と殆ど同じ感覚で読めて、日本ほどの変化はない。日本において、明治維新以来の西洋文明の摂取。そして又、目まぐるしい社会の変化は世界にも類を見ないものなのである。こういう変化の激しい日本の社会が、人の心を不安にしている。それに対して、変化を経験しない社会、安定した社会では、親の心も落着き、そして又、子供の心も落着いているのである。

組織立った社会　どこか幼稚園を参観したいと思う時、私は教授に紹介で頼みにゆく。教授は私の希望をきくと、机の上のラジオのような形をした、構内通話機のボタンを押して、隣室のタイピストを呼び出す。通話機を通して私の紹介状を口授する。それから電話の受話機をとり上げてその幼稚園に連絡し、何月何日の何時に私が訪ねてよいか、と問い合わせる。私は帰り際に隣室のタイピストの宅に寄って紹介状を受けとる。その間五分位でこんな簡単なことは万事終りである。すべてが此の調子で、大がいのことは何をするにはどういう手續をふむということができる。そのもつと複雑な社会の組織の中に人間を引き連れて行くことが、教育の大きな使命の一つである。そしてそれぞれの要所の専門家を養成することが専門教育或いは職業教育の機能である。丁度アメリカの都市の道路が整然と区劃されて並び、街路にはすべて名前がつき、各家屋は番号がふつてあるように、それから都市と都市をつなぐハイウェイにもすべて番号がついて、全国的にきっかりと組織立ち、その一つ一つの道路が整然と整備されているように、社会全体がきちんと整った

一つの組織なのである。

自信のある社会

日本の社会で学問しようとする時、日本語だけでは用が足りず、どうしても外国語を学んで外国の書物を読まなければならぬような気がする。外国語を読み始めると、自分の国の言葉ではないから、理解出来ない所も出来てくるし、時間もかかる。いくら進んでも莫大な量の外国語の書物に目が廻ってしまふ。日本語の書物を読んだだけでは、まだ何か他にもっとよいものがある様な気がして、どこまで行っても自信が持てない。所が、現代英語文化の中に住むものにとっては英語の書物に目を通せばそれで事足りるので、心ゆくまでそれらの書物を読めばそれで自信が出来るのである。学者のみならず、実務家にしてもそうである。絶えず新しい外国語の単語が日本語の中に出てくる。カリキュラム、コアカリキュラム、プラスチック、レディネス等々、こういう言葉を自分が知らないと不安になる。所が英語文化、英語生活の中ではこういう言葉は何も専門用語としてのみでなく、日常の会話の中にもっとくだけた意味でいくらかも使われるものなのである。こういう語を特に勉強しなければ理解出来ないのである。所が英語文化は英語の生活の中から英語の社会の中で生れたものであって、その社会は、日本語の文化日本語の社会とは、いろいろの点で必要性や考え方も違うものなのである。もしも日本語で日本の社会の必要性を満すような方向に皆が努力するなら、社会全体がもっと自信をもって自らを統整するようになるであらう。此の点アメリカは自信のある社会である。

歴史、風土に規定される人間

社会は、歴史と風土に規定されて

おり、人間も又、歴史と風土の影響を知らず知らずの中に受けていられるように思われる。アメリカの社会それは、つまり無尽蔵な程広大な天然資源の中に人間が移住してそれを切り開きつゝ、拡張した社会である。今から百年前までは、自分で切り開いて耕した土地は自分の所有地になった。そこで自分の手で家を立てたらそれは自分のもので、一国一城の主となることが出来たのである。こうゆう社会の伝統が人間の中に流れているように思われる。それが日常の一寸したことの常識の中にあられる。例えば日本では家を建てると云えば、大工に頼んで、隅から隅まで壁紙を張る事から糊をつり、カーテンをかけることまで、やってもらう。アメリカの常識はそうではない。家は自分が建てるものである。だから随分金のある主人でも道具を揃えておいて、家中の壁紙を張ったり洗面所のタイルをはめたり、天井のベンキを塗ったりということは自分でするのが常識である。こういう歴史風土から来る伝統のある社会の中に子供は生れるのであり、その社会に適合する様に子供は育てられ、又育つてゆくのである。特に教育理論の相違を待たずとも、異った社会に育つた子供は、異ったように大きくなるのは当然のことである。

日本の幼児教育の課題

此処で私は日本の幼児教育の課題——それは教育全般の問題でもあるが——を提出して、考察してみたいと思う。

多くの人口を持った狭い国土で、幼児教育は何をしたらよいか。

人口が多いと国民生活のいろいろの面にそれが影響するが、流行ということもその一つである。凡そ日本程流行が多く、又それがくくるる変る国はない。というのは、多くの人の云う所であるが、服装は勿論、文章の型、考え方などにも流行がある。これが人口の稠密さと関係があるので、例えば誰かが東京で悪いことをして評判を

落すと、北海道から鹿児島の間まで悪評が伝わつてその人は立つ瀬を失つてしまふが、アメリカならば、シカゴで悪いことをしても、ニューヨークやロサンゼルスにゆけば、全く白紙になつて出発することが出来る。同様なことが流行にもあるのである。勿論、これは人口の稠密さだけでなく他のいろいろのことが関係しているのであるが、ともかく、流行すると、その流行が果して妥当なものかどうか、ということを経本的に考えることをしないで、全体が時流に動かされていまい。それでは社会に落着きもなくなり、安定した社会の目標が出来ないのも当然なのである。そして子供はただ、むら氣な大人の社会に躑躅されてしまう。最近の幼児教育界に關係のあることに例をとつても、最近の私立小学校の受験熱と、そのためのテスト熱は、いろいろの理由はあるにせよ、流行の一種であろう。私立小学校を受験するために、知能検査を幼稚園の子供が練習するというようなことは、此の数年間の日本の社会独得の現象だろうと思ふ。

さて、此の人口の多い国、そしてどん／＼多くなりつゝある国で幼児教育は何を貢献するだろうか。人口の少ない国ではお互に必要なの上から助け合い協力し合いお互に認め合い、立て合うようになるけれども、人口が多いと、お互に隣の人をおしのけて人より少しでも

上に出ようということになる。そしてその結果は人口過剰の弊をますます大きくするのである。限られた土地で、多くの人間が、互に調和して仲よく生活し、円満に社会を運営してゆくことが出来るために、幼児教育は何をしなければならぬだろうか。

混乱した社会で、社会は幼児のために何をしたらよいか。

日本の社会は又、近代社会と中世の社会との異様な重なり合ひである。東京の道路を歩けばそれが直ちに分る。高く聳えた鉄筋の近代式なビルディングとその蔭にかくれた平家の小さな個人住宅、狭い道路をあたり構わず走りとばす自動車の群、その中を隙を見て横断する人間、おせんべいや飴玉を並べた小さな駄菓子屋の軒先よりも、都会でも人々は情緒的なつながり合ひを持ち、社会という単位よりも家の単位の方が個人の生活に大きな力を持っている社会の中に、近代の機械技術文明が無秩序にのさばりこんで来たのである。自らの社会の中から必然性をもって生れ出て来たのでないために、他との調和を破つて、これらの近代文化が殊更に横暴になるのである。大型バスのすれ／＼に通る軒先で遊んでいる幼児、そしてその子供達のために備えられる公園もなく、公園はあつても指導者がなく、そうして混乱した大人の社会に押し出されてゆく子供達のために、社会はもっと考慮しなければならぬ。

そして、近代と中世、西洋と東洋との間にはさまった日本の社会の問題を解いてゆくのに必要なこと、即ちそれらの複雑な社会の交鎖の中で人間の幸福を先づ第一に持つてくる人間を育てること、そしてそれらの問題を賢明に処理する能力を持つた人間を作ること、

が我々の社会の課題であり、日本の幼児教育は、世界にも稀な此の複雑な社会の問題を解くことに貢献しなければならぬ。

近代文明の極度に進んだ廿世紀後半の世界で幼児教育は何をしたらよいか。

上に述べた様に、日本の社会は自身の中に多くの解決すべき問題を持つているが、又同時に現代の世界の動きの中にあつて、世界の他の国々との問題が解決されなければ、同内の問題も解決されないような時代になってきている。廿世紀に入つてからの近代文明の発達は世界史上にも類例のないものであり、飛行機を始め、あらゆる交通機関の発達は世界を日に日に短縮している。今や、世界の隅々までも近代技術の影響を受けぬ所はない。南洋の奥地から北極に至るまで、今まで数千年も殆ど自分達だけで暮っていた所が、いやでも応でも他の社会と接触することを余儀なくされている。そこで、全く異つた文化が互に接し合い、異つた人種が互に接触し合うのである。その準備がないと、種々の誤解や争いが起つて、人種の偏見も出来るし、戦争も起る。表面の皮をはげば、人間は皮膚の色文化の相異にも拘らず、お互に同じ情を持った人間であることを発見するの。

廿世紀の後半は世界中の交通がますます繁しくなるだろう。世界の数十億の人々が、欲すると否とに拘らず、今や世界という舞台に押し出されて変化を迫られているのである。その意味で、現代の子供は、その親達の経験しなかつた新しい社会に出てゆくのである。人種と国籍と文化とが世界中に交鎖する。その中で教育は一体何をなすのだろうか。

(お茶の水女子大学講師)

謹賀新年

昭和二十九年一月一日

日本幼稚園協会

◆近刊◆

東京都麻布幼稚園長 鈴木虎秋先生

東京学藝大学講師 角尾 稔先生 共著

千葉大学附属幼稚園長 宮内 孝先生

幼稚園教育の實際

序文……倉橋惣三先生

【内容】幼稚園教育の目的・幼児の成長発達・幼稚園の教育課程・幼稚園に於ける指導・教育内容の指導法・幼稚園の環境

新しい幼稚園教育の在り方と實際について説かれた教育関係者必読の書

発行所 株式会社 フレーベル館

A5判三五〇頁
クロス装製本
予価 三五〇円

W・H・O 主催

児童精神衛生会議に列席して

平井信義



(一)
空路シドニーに着いたのは八月五日の朝であったが、飛行場に降り立つと思わずみぶるいがする程寒かつた。

早春といっても、まだ木の芽の固い大学の寮に移ったのは八月十日で、その日十七ヶ国から六十五名の代表が参集した。小児科医はもとより、精神科医、心理学者、教育家、児童相談所関係の役人、ケース、ワーカー、それに英国から文化人類学者を混えて、各分野から児童の、それも七才以下の子供を対象として検討が加えられた。

会は九時から始められた。一時間は主題に関する講義があり、その後は六班に分かれて、各国状に基づき討議が昼すぎまで加えられた。二時から一時間の講義に引続いて再び討議が行われ、夕方約一時間ほど主題に関係深い映画が上映されて終るのが、大休日課であった。

同じ寮に在るから、朝夕のお茶の時間にも食事の時間にも等しく顔を合わせることになる。討議会で討議し尽されないことは、その時に持越されることさえあった。総各班には互選したまとめ役があり、その人たちが討議内容を持寄って結論を出す。その結論に関する討議会が三日に一度夜の八時から十時すぎまで続けられることさえあって、総てが始めての経験であり、会話に慣れない私は初めの一週間は非常に疲労した。しかし私の班の学者たちはみな親切で、討議に熱がのって話し方が早くなると、「ドクターひらいがいるからもっとゆっくり話そう」と注意し合ってくれた。

(二)

シドニーの飛行場についたとき、取囲まれた新聞記者から第一に聞かれたことは、原子爆弾が落ちた当時母親の胎内にいた子供のその後の發育は如何ということであった。原爆研究所の報告では今までのところ大きな影響がないという。私はそれを答えた。第二回は

「日本の幼児の教育であなたに一番大きな問題は何か」という質問であった。私のまわらぬ口をつけて出た言葉は意外にも「年寄り」であった。興味をもった記者たちは、盛んにその理由をききにかかった。私は日本の非常に多くの家庭では都鄙ともに年寄りが一緒に生活し、経済的或いは教育的に強い影響力を持っていること、総領を可愛がり次子以下を軽視し、それが両方の子供たちの性質をゆがめてしまうことを述べた。「グランマ（祖母）が不良少年を作る」という大きな見出しでそれが翌日の新聞に載って、それに関するアメリカや濠洲の学者たちの意見が続いていた。

ドクターひらい、といえばグランマということになって、会議の途中にもしばしばこの問題が取上げられた。それは「家庭の中で誰が子供に対する権威者か」「東西の異った文化形態の中で、子供はどのようにしつけられているか」という問題が三日間に亘って討議された際に問題となったことであった。

東西が如何に異った文化形態をとっていることか、——今度の会議で私の得た最大の収穫はこれであった。日本の家庭のあり方が英米の人々には理解できないらしく、私の家庭が十一人であるという、一体誰と誰とが住むのか、室の間取はどうか、いさかいはないのか、などの質問が出た。そして、両親以外の者が——例えば祖父母とか父の弟妹たちが子供の養育に大きな役割を持つことが、子供の社会性に意義があることだろうときかれもした。

おちぎの仕方問題となった。日本ではどのようなおちぎの仕方をするか、幼稚園で先生と子供の間はどうかなどきかれたので、どの家庭でも朝先生に会ったときに、ていねいにおちぎをするように

しつけていると話したら、みな不思議そうな顔をした。私は日本には「三尺下って師の影を踏まず」という諺があると話をしたら、「太陽がくるくる廻るときにはどうするのか」などとひやかされてしまった。

欧米濠洲の人々のおしゃべりのひどいのは驚いた。と同時に会話の下手な私には食べ物をおちおちできないほど苦痛であった。話しかけられるとおいしいラム（竹羊の肉）も喉を通らない。そこで一計を案じて、我々は小さいときから「食事のときは黙って食べるように云われ、子供たちにもそう教えているから」と口止めしようとした。ところが彼らは俄然その問題に興味を示して、その理由如何子供の祝日にもそう戒めるのか、日本へ帰ってからあなたはどのようにと思うか、など次々の質問に、私は茫然としてしまった。

文化人類学者フアース教授は、檉の木一本でさえも東西では異りそれからうける印象もちがうことを述べられた。ましてホームに於ての考え方、子供が父母をみる見方、両親が子供をみる見方、延いては大人が子供をみる見方が非常に異っているのではないか、と思いはじめた。従って文化形態のちがう国の教育理論やしつけの方法をそのまま直輸入して宣伝している人が日本の学者の中には案外多くことにその人たちが実際に子供たちに接触して吟味することなしで発表しているような場合には、ずい分危険なことではないかしらとしみじみ思った。

(三)

「母性愛」の問題は非常に大きく取上げられた。中でも母親及び母親に代る者がなしに育てられている子供、——例えば乳児院やそ

の他の施設に收容されている子供たちが、如何に性質の上のゆがみを持ってしまふか、しかも施設に入る年数が少ければ少い程弊害が多いか、或いは病院に入院する際にさえも母親から離すことは弊害があることが執拗にのべられた。最良の施設であっても、悪い家庭よりも劣るという結論であった。従つて欧米では里親制度に切替えているし、病院に入院する際にも母親をつけるように努力しているという。

私には第一に疑問に思えたのは、最良の施設であるのに、それがどうして子供によくない影響を持つつかという問題であった。少くとも一才未満の子供である限り、我々の乳児院の子供たちは、入院中特別の問題を持たないし、退院していけば普通人と何ら変りがないことがわかつている。他の乳児院でも次第に問題が少くなつてきているという。

ところが、施設は恐らく遙かに完備している英米で、どうしてこのような問題が起るのであろうか。私の意見を求められたとき、私は保育者の性質の問題だと言ひ切つた。殊に施設で子供に接するものは大部分女性であるから、その女性の性質がどうか、という問題が一層大きい。私には欧米の保育者を知らないから比較の限りではないが、日本の保育者が子供に接触するその仕方が、非常に多くもあり、身近なものではないかということである。その一つの証拠として、「皮膚関係」ということが強調された。例えば母親とその子供にしても、もっと皮膚関係を重要視しなければならぬという点である。

我が国の場合には、実は母と子の皮膚関係が濃すぎて困つてい

る。お乳は泣けば与えられ、お誕生をすぎても或いは二た誕生をすぎても与えられることは珍らしくない。或いは畳の上の生活は、多かれ少なかれ添寝をしている。そうした関係は病院に入院した際にも続けられるので、医師や看護婦は治療がしにくくて困る様である。私はその点を強調し、フィリップスやビルマの代表たちもそれを認めた。しかし、英米の代表たちにはなかなか飲み込めぬらしい。結論として出たことは、日本及び二、三の東洋の諸國をのぞいては病院で母親の附添いをさせることに賛成及び施設收容児を母親のもとに送るということになつてしまつた。

(四)

各国からの代表が、半分以上女性であつたことは、私にとって最大の不幸であつた。女性を尊重する風習になじんでいないので、初めから面喰つてしまつた。お茶のサービスなどはみな男性がする。椅子を探していればもつていく、外套を着ようとしていれば素早くかけてやる、道を歩くときは必ず内側に女性を並ばせる、——こうしたことによく勉強しておかなかつたので、ずい分不しつなこともしてしまつたらう。

見るに見かねてか、私の班のスタンピング女史といつても五十前後の婦人で廿貫以上ですから御安心下さい——が私に早く西欧の習慣を覚えさせようと、毎晩のように衝へつれ出し、映画にも五・六回いったらう。実は私にはこれが非常に苦痛であつた。瘦せっぽちの私が女史の腕を支えて映画館の階段を上つていく光景は、我ながら哀れな気がした。

特に濠州では妻君を大切にすることが強調された。こうした家庭

の在り方の中で、子供たちはどのような女性観を得、男性観を得ていくであろうか。英米の学者には、我が国の家庭生活の中で何でも夫が先にし、妻が従うという形式は理解できないようであった。今更のように、私は「男女同権のしつけ」ということを考えた。この点でも濠州の学者から、あなたが日本に帰ったら、現在の如き婦随させる態度をかえるか、と吃問された、私は返答に困った。

この問題は、性教育や家庭教育の在り方を規定する重要な因子であるから、私どもはこうした差異がどうして生れたか、これからどのように養えていくべきかを真剣にかんがえなければならぬと思つた。

(五)

その他、妊娠中に母体が受けた影響が、どのように子供に及んでいるか、——この問題で非常に大きな業績を挙げたのは濠州のグレン博士であろう。従来遺伝であるとのみ考えられていた子供の目・耳・心肝などの畸形が、妊娠三ヶ月以内に母親が風疹に犯されたときに起り易いことを発表して、遺伝に対する環境の因るを強調した点にある。

我が国では幸なことに、この病氣は大部分が子供のときにかかるので、殆ど心配がない。当時シドニーではこの病氣の流行があり子供の罹患が多く大人に少いという事は不幸中の幸いだと結んであつた。

その他、接取問題や題排尿便のしつけの問題が論議された。異常児や精神薄弱児についても、短時間であつたが、話し合うことが出来た。

(六)

この度の会議に於て最も大きな収穫は、東西の文化が、或いは日本及び諸外国とが非常にちがう、そのちがっている上に育児の問題がのっているということである。我が国にはもつと我が国の国状に基いてしつけなどのカリキュラムが立てられることが大切である。

再び空路マニラを経て東京に帰り着いたのは九月一日。町々を歩きながら、しみじみ感じたことは、何と子供が多いことか、ということであつた。濠州の広大な土地に東京都の人口しか住んでいない。私の滞在中にも新聞の第一面に大きく生めよ殖せよとうたつていた。従つて妊娠中から育児期間を通じて國家の保証が十分行き届いている。一人の最低保証が七千二百円とかきいた。しかも、濠州の人々は大体「二児制」であるという話であつた。

貧しい国、——何と日本は貧しいか——会期中、東洋の諸国が西洋の諸国に較べていかに貧しいことか、總ての文化が貧しさを土台にして出来上つていのではないかと思われるほどであつた。

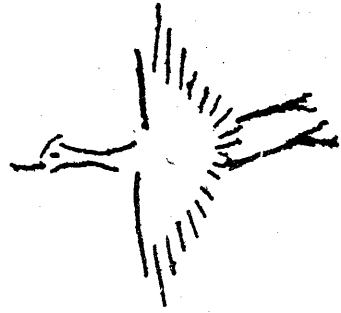
(お茶の水女子大学助教・愛育研究所員)

×

×

×

×



年頭にあたって

山 村 き よ

まえがき

編集の方から一月杓に何か所感をかけとのことで二、三日頭をひねづている時に丁度十一月杓を手にして三木安正先生の、「はき出させる教育」を拜見して、日頃私の頭を占領していたことがみんなはき出されたような喜びを感じて、くりかえし拜見いたしました。そして私も又、日頃考えていることをぺんの走るままに、はき出させていたぐことにしました。

よろこび

ここ二、三年の間に幼稚園の数がぐんぐんふえて、文部省の昨年度の調査によると国公私立あわせて二八〇〇園余りとか。きつと本

年度中には四〇〇〇近くになるのではないでしようか？ ほんとうに嬉しいことです。それにも増して嬉しいことは、戦前には殆んど幼稚園のことを問題にされなかった教育行政にたずさわる方々ことに文部省内でさえ、重要なポストに居られる方々の中に幼稚園のことを認識されていないで幼稚園関係者を悲しませていたものでしたが、最近では初等課の方々は勿論、それ以外の方々からも幼稚園のことを取りあげていただいたり、一般社会の方々や、同じ教育畑に席を同じくして居りながら幼稚園の存在をみとめて下さらなかった小学校の先生方に、ようやく就学前教育の重要性をみとめていただいて「幼稚園の位置」がはつきり浮び上ったように思われます。去年から、今年にかけてはラヂオや、新聞終上に幼稚園の問題が多く報ぜられてその度に幼稚園関係者は、喜んでみたり、又驚いたりしたのですが、義務教育でない幼稚園が制度の上では守られていな

いにモデルスクールの仲間入りをして文部省指定のモデル幼稚園が全国で八園も誕生したことや、はじめて二十八年度の国の予算の中に金額は僅かではあっても増設補助費として四五〇〇万円、モデルスクール施設補助費二〇〇万円など計上されたということは、何ととってもよろこばしいことでした。学制八十周年の祝典に参列できた喜び以上に嬉しいものがありました。おそらくここから道が開けて来年度からは幾分なりとも予算のともなうことがらに光明の見えること、思います。私共が三十年來叫んできたことの道が、今よりやく開けたことに限りないよろこびを感じています。

憂い

しかしこうして各方面の方々や、一般社会の人々にまで幼稚園教育が重要視されてきた時に、いつも批判的になるのは「現在生れつゝある幼稚園の姿」です。学者の方々や、教育関係の方々から「今日の幼稚園のあり方」についてするどい批判をうけたり、最近お目にかかった方で、かつては幼稚園行政の重要なポストに居られた先生から「僕は幼児教育は好きだけれど、今の幼稚園はきらいだ」と伺ったとき、一時はやっきとなって、どこに問題があるのか反ばつてみたいと思いましたが、靜かに考えて見れば、私でさえやっばり同じようなことを考えている一人だったことに気づいて、はつきりと位置づけられた幼稚園の正しい使命を考えたとき、いろいろの点で案じられることが次々と頭に浮んできました。幼稚園の良心的な運営、良心的な教育内容、教育の方法など、気になることばかりです。次々に増設されるバラックのような園舎に集められることも

達、何の設備も施されていないがらんとした建物の中に収容される多くの子ども達の毎日の生活内容を、のぞき見したり、保護者や、先生達の訴えをきいておどろくこの頃です。

何ととっても一ばん目につく音楽リズムの取扱いで、三十年前と少しも変わっていない振りつけ遊戯を一生懸命伝授している幼稚園のあることや、以前にも増して盛んになった「幼稚園遊戯会」はては幼児のための「舞踊コンクール出演」など……およそ幼児の楽しむ音楽生活とは、かけはなれた生活があちこちにのぞかれて悲しい現在です（詳しくは十二月号、幼児の音楽リズムについてを御参照下さい）。

絵画製作では相変わらず、「ぬりえ専門」の遊びで一日を終ったりごっこ遊びなど、八百屋さんや、おもちゃ屋さんにならぶ売品はみんな同じ形、同じ色のものばかりで、どこに幼児の創作的生活があるのか、「はき出させる教育」とはおよそ反対な指導のなされていることに驚きます。子どもに創意がないのではなくて、常に創作的な指導をされていない結果が「自分でつくり出すことをおっくうがって」安易なぬりえ式の製作を喜んだりするのでしょうか？

今も昔も変らない土曜日のおみやげ、その他行事の前日には先生方が夜業をしてまで造つて贈るおみやげの、よし、あし、は別として「何も子どもの知らぬ間に用意ができてしまうこと」……が子どもの生活のどこにプラスするのでしょうか？

園外保育などにしても、今だに見かける幼稚園の遠足風景は保護者のために考えられているようなものだと思います。食べきれないような沢山の食料を用意して、ぞろぞろと子どもの手をひいてある

く行列は、おとなのかけにかけられて何も見えない子どもの遠足風景です。こうした中で自分の持物の、仕末や、お弁当の後仕末を子どもに一人でさせているお母さんがどの位あるでしょうか？ きっと子どもの知らない間にきちんとかたづけられてしまうのではないのでしょうか？ 園外保育で一ばんだいいじめな社会性を育てることや、観察させることの生活がおとなのじゃまによってできないことを考えて特別に保護者の指導をされているところは別として、……前のような生活で子ども達は遠足のためにプラスする生活があるでしょうか？ すべてに受身の生活がまっている幼稚園の中で「はき出させる教育」が営まれるでしょうか？ 案じられてならない幼稚園の前進です。

ある地方での質問に「先生この頃近くにできた幼稚園で、二学期になるとみんな字を教えるから、それを見る私の幼稚園の保護者も心配して教えてくれ、教えてくれとせがむので保護者に何と返事をしたらよいでしょうか」と問われてこの良心的な若い先生に、いろいろと保護者に対する答え方を指導するのに骨がおれたと、東京に帰ってからある会で話したところ「田舎ばかりではなくて、東京にだって沢山ありますよ」と教えられて二度びっくりしたことがあります。この他最近耳にしたことは、附属小学校に入学させるために毎日テスト、テストで追いまわされて可哀そうだと、その幼稚園の先生のなげき、又甚しいところでは昨年度附属小学校に一人も入学させることができなかつたと云う理由で幼稚園を退職させられたという年とつた先生のなげきや、「来年こそ三人は附属小学校に入学させてくれ」と園長先生からきつい注文をつけられているという新卒

の可愛い先生の訴えをきくにつけ、何のために幼稚園にきているのかそれらの幼稚園の先生や、子ども達に同情しているこの頃です。こうしたことを考えると、三十年前の幼稚園の子どもの方がはるかに幸福のように思えてなりません。希望すればいつでも入園できて、きゅうくつな机上プランにしばられることもなく一日をのんびりと遊び暮らしていた昔の幼稚園の方が、ある意味では情緒の安定した日常生活だったのではないのでしょうか？ 昔の幼稚園でも、こうして豊かな人間性を養い、自尊心をもたせて、創意に富んだ生活指導をされていた幼稚園があちこちに見られていたことを思い出して、前のようなこともと比べて可哀そうになることが度々あります。今の幼稚園でも、昔の幼稚園のように、すべてに受身の生活ができるように、どっちをむいても先生の手が親切に行き届き過ぎて、いる心配はないのでしょうか？ これも又案じられてなりません。

無計画に増設される幼稚園の数の多いことが先生の不足を生じ、唯でも女であればまに合うと思つて採用された若い先生方から、思いがけない質問をうけて返答にこまることしばしばあります。そんな質問にも笑はないで親切に答えてあげたいと、思うと同時に、幼稚園の無計画な増設と、幼稚園教育の低下ということを悲しみます。一ヶ月に十五園平均は新設されているという東京の私立幼稚園の実態、又保育料で自給自足を立前とするために、俸給のやすい新卒の先生を採用せねばならないある地方の公立幼稚園の現状……その中で日増しにするどく批判しようとなさる教育学者、心理学者の多くなされたこと……どこの幼稚園もみんな「日本の今の幼稚園」として批判される悲しみをもっているのは私ばかりではないと

思います。

のぞみ

以上のように幼稚園の多難な時代をきりぬけるにはどうしたらよいのか、多方面にわたって日夜頭をなやまして居られる幼児教育者が全国には数多いこと、存じます。どうしたら良心的な幼稚園の経営ができるか？ どう運営したら良心的な幼児教育ができるかと熱心に研究し合っている団体もあちこちにちらばっていることと思えます。

今こそこうしたことに関心をもって熱心に研究し合っている人々が、教育実家も、経営者も、学者の方々もみんな手を取りあつて力を結集して、日本の幼稚園のためにこの多難な問題を一つ一つ解決して進んで行ってほしいと念願してやみません。私など古くから幼児教育にたずさわっている者の一人として痛切にその責任を感じます。

昔から幼稚園は、ぜいたくなものとして世間の人々からは特別視され、教育関係の方々からも毛ぎらいされていた「昔の幼稚園の姿」を一日も早く「就学前の正しい教育の姿」にきりかえたいものです。それは私共教育実家にかげられた大きな責任だと思えます。そして名実共に新しい姿の幼稚園があちこちに誕生するようにお互いが協力し合うことこそ必要なことだと思えます。そのためにはあちこちにちらばっている団体が、それぞれとちこもっていないで、みんなが手を取りあつて行かねばならないことだと存じます。しかし東京のように多くの団体をもつ地区としては実に勇氣と、

努力のいることと思えますが、今こそ「日本の幼稚園」のために考えねばならない時がきたように思います。そして心から日本のことを想い、日本の幼稚園のことを考えていて下さる方々が手を取りあつて進んでいく時に、日頃何かと批判をされていて下さった教育関係者の方々に、心からの御援助がいただけたら私共幼児教育者はどんなに幸せなことでしょう。そうした団結の力がやがては国の力をもゆり動して、制度上にも財政的にも国の援助がいただけるよう、な道がひらけたら日本の幼稚園はどんなに發展して行くことでしょうか。こうしたことを夢に終らせないで何とか実現させるように勇氣を出そうではありませんか。

幼年教育研究会

小学校の先生方から幼稚園を終えてきた者は「依頼心が強くて困る」とか「わがままでこまる」とか云われた場合、幼稚園の先生方はふみつけられたような氣持と、一年なり二年なりを育ててきた母親のような愛情から、「ふんがい」するだけでなく、今現に自分達が育てて渡したこどもが小学校で「わがままな行為をして友達にめいわくをかけてはいないだろうか」「学習の気分をみだしてはいないだろうか」と静かに反省してみる必要があると思えます。そして自分の育てた子どもに自信をもって学校に渡せるように、家庭教育をも指導しようではありませんか。あまりにこどもの氣持ちをくみすぎる幼稚園の先生方があれば、小学校には割合にこどもの氣持にはとんちやくなしに、学級としての成績をあげたい先生も居られること、思いますので、その間には大きなひらきができて間に

はさまることも違ふそい迷惑だと思ひます。まして子どもの生活が幼稚園にばかりあるのでなく家庭生活に多くの難点をもっている子どもは小学校入学と同時に、幼稚園での効果は消えて、もとの生活にもどることさえありますのでこんな点を充分に進歩させた小学校の先生方と話し合いをする機会を常にもたねばならない筈です。少くも一年、二年の集団生活を経たものと、そうでない者とが同じ取扱いをうけているならば幼稚園修了者は、小学校の生活に対してあこがれをもつて入学しただけに、よけいに不満をもつたり、物足りなさを感じることもだと思ひます。そしてトラブルを起している気持ちのはけ口をあちこちとさがすにきまっています。しかし大勢一まとめにされたきゅうくつな生活の中ではきつと幼稚園からきた者が一ばんさきに、学習をみだして困る、ということになり勝です。幼稚園の三期の生活と、小学校一年一学期の生活にはきつとだぶることのあるのは当然だと思ひますので、そうした生活の重なりも、唱歌などのような教材が同じになる場合も考えられますのでそれらの指導の仕方に変化をつけていただくように学校の先生方にお願ひすることも必要だと思ひます。多くの小学校の先生方の中にはきつとこうした願ひをききとどけて下さる方もあると信じます。小学校側にしてみれば一学級の二割か三割の幼稚園修了者のまじっていることに大変やりにくさを感じて居られると思ひますが、反対に二割三割の幼稚園修了者のまじっていることを喜んでいて下さる先生もあるのです。今までにも多くの新しい教育法をとって居られる先生方にお逢して、いろいろと昔の幼稚園や、今の幼稚園の盲点をつか

たことも度々ありました。又小学校低学年と幼稚園との懇談会には、いつも仲裁役をうけもたされてきた私は、幼稚園の先生方に、自己満足の気持ちをおさえて、気持よく研究会をもたれることを望むと同時に、自分のしていることに自信をもつて小学校の先生方に幼稚園の教育内容が説明できるようになつてほしいと思ひます。最近各地方のあちこちにもたれる「幼年教育研究会」の盛んなつてきたことを喜ぶ一人です。今の小学校の生活にあわせるために幼稚園の教育内容を組み立てる必要はないと思ひますが一応お互いのカリキュラムを検討し合つたり、小学校入門期の学習内容や、幼稚園の生活内容を両方の先生方が知り合つておくことはぜひやらねばならない大事な仕事のひとつだと思ひます。私共が苦心して育てて渡した子どもが小学校でどんな生活をしているか、のぞいてみると、せめて三期の幼稚園の生活を小学校の先生方にみていただいて「やっぱり幼稚園教育をうけてきたものは教育がしやすい」と小学校の先生にも幼稚園の効果のみとめていたゞき度いし、小学校の先生から「幼稚園を終えてきてよかったね」と口には出さないでだまつて頭をなでていたゞきたいと思ひのはいけななことでしようか？

子どもの成長発達の上に立つて良心的な幼稚園教育をうけて入学したものが小学校で「学習のじまをしたり」「依頼心がつよくて世話がやける」などとは考えられません、今の新しい教育が、子どもの過去の生活を基礎として、子どもの生活経験をもとに指導計画が進められているならば、正しい幼稚園教育をうけてきてよかったと、小学校の先生方も幼稚園教育の効果のみとめ、又子ども達も楽しい学校生活でますます豊かな人間性を養はれて行くことと思ひま

す。そのためには現在生れつつある各地の幼年教育研究会には、いつも小学校、幼稚園の先生方が同数位づつ出席されてお互いに協力し合って行ってほしいと思います。現在の状態はこうした会合の会員のうち二、三割が小学校の先生方で幼稚園の先生方が七割以上をしめ、大事な研究協議会になるとお互いが自分達の立場のみを主張して割切れない感じで終ってしまったことも度々ありました。幼年教育という機関が、幼稚園と、小学校とをスムーズにつなぐだけのことではなく、就学前のことも全体と小学校一、二年までのすべての教育機関として、家庭教育、社会教育、就学前教育、小学校低学年の教育を一本と考えてすべての方面にいろいろと研究がなされるように、現在生れつつある各地の幼年教育研究会に大いに期待するものがあります。

む す び

以上思いつくままにペンを走らせて大事な紙面をいただいてしまったことを申し訳なく思いましたので、実際家としての私が、先きに「愛い」としてみたり、きいたりしたことをいろいろのべてきました責任上最後に、自分の日誌の一部を御目にかけて、私としてはこれが正しい教育の一場面であると自信をもって御紹介申し上げます。どうぞ充分に御批判下さいますようお願いいたします。

園外保育の日誌より

五月のさわやかな空気を胸一ぱいに感じながら、子供達の足どりもかるくはずみです。

唱歌「今日は遠足うれしいな、母さんいってまいります………」と唄う歌声にも明るい希望が感じられます。

男の子と女の子二人づつ、仲よく手をつないで歩く姿もまたほほえましいものです。

「あっ、消防自動車だ」

「もうせん、僕んちの方が火事だった時きたよ」

こんなとき、話し出すのは男の子たちです。二郎君と貞雄君が一生懸命話しているとき、善郎ちゃんが、

「あれ——変な雲だなあ——」といい出しました。そして急に空の雲に気づいた善郎ちゃんの足はすすみません。前の友達との間があいてしまいました。

先生「先頭さん、ちょっとまって頂戴、今、善郎ちゃんが雲をみつけたから」

みんな立ちどまって空を見上げました。なるほど青空に白い雲がはっきり見えます。しかも雲足早く次第に形が違ってゆきます。

先生「いつもと違うわね」

「いつもお空がまっ白で雲が見えないよ」

先生「そら、そら、善郎ちゃんをよく空を見るわね、みなさんも、ときどき空をみてごらんさい、おもしろいわよ、さあ先頭さん歩き出して頂戴」

先生「もう少し行くと交叉点があるから気をつけてね、信号をよく見て渡りましょうね」

お話しながら元気に歩いていると交叉点のところにきてしまったので、信号のかわるのを見ながら、注意をしたり、話し合いながら

先生「四列に並んで渡りましょうね、わき見をしないでね」

先生「赤だったら、どうするの？」

一同「止っているの」

「青だったら」

「いっていいいの」

一郎「先生、だいたいときは注意ってことだね」

等々

話しているうちに丁度「青」になったのもう一回変わるまでに用意しながら（四列になるように）

先生「先頭は、春雄ちゃんと三郎ちゃんと……あきちゃんと……

それからひろ子ちゃんね、向側のたばこやさんの前に待っていて頂戴ね、一ばんあとの先生が行くまで動かないで並んで待ってね」

四人「はい」

びっくりするような四人の大きな声に道行くおとな達の顔をほころばせているときに、「青」になったので、

先生「さあ、早く渡りましょう、わき見をしないでね」

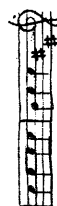
こんなに交通のはげしいところでも（新橋田村町交叉点）規則を守れば安全に大勢の子供達が行動できるものだと嬉しく思いながら先生は一ばん後について、早足で渡りました。

何だか幼稚園の子供のために信号がゆっくり変ったようにも思えたのは「まちがいで子供ながらに緊張してわき見もせずには大いそぎで渡った機敏な動作に私はいつも幼稚園内ではみられない嬉しい情景を見出して、園外保育の効果をはっきりとみとめることができました。

先生「先頭さんも、みなさんも、ずいぶんじょうずに渡れましたね

ほら、よそのおちさまや、おばさまが感心して見ていらっしゃるわ」

子供達がるほどと思うように、五、六人のおとな達にここにしながらこのようすを見ていて下さいました。みんなの顔も優越感で一ぱいです。二度目の交叉点も無事に通って日比谷公園の入口が見えるところまできました。先頭の者はいそぎ足ではしゃいでいます。そのうち聞える唄声は、



「はっぱのトンネル、はっぱのトンネル」と誰かが唄い出したのに合せてみんなが「はっぱのトンネル、はっぱのトンネル」とメロディーは実にかんたんなものではあるけれど、ほんとに幼児達の今の気持ちを歌ったすばらしい創作です。プラタナスのしげっ

ている並木路はほんとに涼しくて気持ちよかったです。とともに二度も交叉点を渡ったときの緊張から解放されて、しかも二十米近くもつづくプラタナスの並木路を、目的地を目の前にして歩く気持はおとなでも何と口ろささみたいような気持ちであったのに……一歩さきに子供の口から発せられたこの歌は立派な作品で、みんなが感じをこめて歌いました。

一同「はっぱのトンネル」

先生「すずしいトンネル」と私も後をつけて同じメロディーで歌ってやりました。それからしばらくはみんなが、

「はっぱのトンネル、すずしいトンネル」と楽しく歌いながら公園に入って行きました。日比谷公園に入ってから子供達のようにこ

ぶものばかりです。中でも遊園地の大きなぶらんこ、すべり台、みんな「魅力」のあるものばかりですから、喜びはしゃいで「けが」のないように私の気持ちは緊張してきました。一つ一つをみんなが楽しめるように、少しづつ順々と遊び歩いて、四、五十分間遊んでから楽しいお弁当に誘いました。子供達ばかりで遊んでも危険のないような場所を選んでゆっくりとお弁当の用意にとりかかりました。手洗いの場所が遠かったのも、もってきた水筒の水で手先だけを洗うように指導してから（私が用意した大きな水筒から水を出して洗ってみせました）水筒のない者に少しづつ水を掛けてやりました。

ゆっくりと、いつもよりおいしいお弁当を食べたあとでおやつも一緒に食べさせました。（キャンデー二個、クリームサンド一個、小丸せんべい三枚位の少いおやつを入れるように注意してありましたので）

先生「みんなのお弁当がすむまで遠くに遊びにゆかないようにしましょうね」

これだけ注意してもがまんできそうもない男児達のために特に、先生「お友達がすんだら一緒に遊びに行きましょうね。おやつをたべながらあるかないことでしたね」

お弁当を食べている私の近くで、ありんぼさがし、松葉拾いなどの危険でない遊びに誘うことにも成功したのは、そばにぶらんこや、すべり台が見えなかったからでしょう。

十二時半にはおかえりの仕度にかかりました、朝は八時頃から、「遠足だ、遠足だ」と喜びはしゃいでいた子供達がつかれぬように、帰園の時間を三、四十分とってゆっくりと幼稚園に帰えりまし

た。そして次のようなことを注意してかえしました。

- 1、家に帰ったら手を洗ってうがいをする。
- 2、リュックサックの中味を調べてもらう。
- 3、楽しかったことを話しながら必ず身体を横にすること、昼寝をする。

（昭和二十四年五月記す）

これはかつて私が西桜幼稚園奉職中に記録しておいたもので二年保育、年長児受持人数三五名、助手一名のときで、できるだけ近い場所に度々出かけるように計画したことが今でもつづいて行われているようにほんとに嬉しいことです。

× × × × ×

尚このような記録を過去一年間に渡って整理し、学び得たことを四百余りの原稿用紙にまとめて、恩師武田一郎先生（お茶の水大学教授、同附属小学校長）心理学者大内義男先生の御検閲、御加筆をいただいで出来上った「幼稚園の教師と母の書」はフレール館でも取扱っていたことになりました、増設にともなつてかり出された若い高校卒の幼稚園の先生方、両親教育に苦心されて居られる先生方の御参考になれば幸いです。（文京区立第一幼稚園長）

お茶の水女子大学教授 武田一郎先生
同附属小学校校長 共著

東京都文京区立 山村きよ先生
第一幼稚園長

幼稚園の教師と母の書

B6判・二三〇頁
価二〇〇円・二四円
三友書房発行



疳の強い子・落ちつきのない子

— 身体の異常か、精神の異常か —

広瀬 興

田舎では、未だ所謂、疳の強い子には孫太郎虫を煎じて吞ませたり、呑竜さまに虫封じに行ったり、或いは額に紅を塗ったり、項部を紙そりで乱刺して射血したりする習慣があります。

こういう子のお母さんは子供の何処かに「虫」がいると信じているのです。その「虫」が体内で暴れて子供に疳を起させたり、落つきをなくさせたりすると思ひ、又、中には、指の先きから白い絹糸のような虫が、煙のようにフワ／＼と舞い上ってくるのを見たと言するお母さんさへあります。事実、蛔虫などが寄生すると神経質となったり、そわ／＼落ちつきがなくなったり、食べ物の好き嫌いが強くなったりしますから、蛔虫——「虫」というように、ごっちゃに考えて了うのでしよう。山梨県のある田舎の保育園の母の会で蛔虫の話をしたところ、そのあとで一人のお母さんが真面目の顔をして「先生！ お腹の中の虫をすっかりおとしてしまつたら、虫の知らせというものがなくなつて困りはしないかね」と質問されたことがあります。

私どもはよく、うちの子は疳が強いとか、落ちつきがなくて困る

とかの相談を受けますが、その子をよく観察すると、その様子がいろ／＼で、又、年齢によつてもその現われ方が千差万別であります。例えば、

(一) 「イラ／＼して怒りぼく、泣き虫で、直きにフンヅリ返つて了うような子」「一つところにちつとしていられない、食べものもこつちを一寸食べたかと思つと直ぐあつちを食べちらかす」或いは「一つことに熱中できず、気が移り易く、あつちへ行つたりこつちへ来りする」「一つおもちゃにすぐあきて別のものになつる」
(二) 「身体の一部を絶えず無意識に動かしたり、咳払いしたりから咳したり、常にクフ／＼鼻を鳴らしたり、頭をかく、耳をいじる、鼻の孔に指を入れたり出したりする、或は貧乏ゆすりをするなど少しも落つきがないという子がいます。

(三) 「一時的に不随意に眠ばたきを繰り返したり、指先きを擦れんさせたりする」これは自分で止めようと思つてもその運動を止めることが出来ない。こんな子も、又、はたで見てみると如何にも落ちつきがないようにみえます。

(四) 赤坊で、絶え間なく、頭を左右に動かしたり、お腹のすかないときでも舌をペロ／＼出したりしている子、休みなく眼玉をせわしくクル／＼まわしている子があります。

(五) 平素、顔色が悪く筋肉の緊張も弱く、口唇の色もさえない発熱し易く吐き易い、そして極れん性で何んとなく不安の様子をしている子があります。

(六) 自分の意に反すると直ぐに怒る、例えばお腹がすいてお乳を与えようと準備しているとそれが待ちきれず怒って了って今度は口へ持っていても飲まない、真紅になって啼泣し、遂いには蒼白になりびきつけて了うようなものもある。友達がおもちゃをとったといって怒り、先きに駆けていったといって怒り、処かまわらずソリ返って、憤怒し、体を強直し、チアノーゼ（口唇紫らん色）となり失心して了うものもある。

(七) 夜中夢をみて物におびえ、起き上って泣き叫び一時、夢中であばれる、しばらくすると自然に落ちつき熟睡し、翌日は昨夜のことは少しも記憶にないというのがあります。

このように、疳が強いとか、落ちつきがないとかいう場合にも、よく、観察するといろいろの種類があつて、身体的の異常からくる場合と精神的の異常からくる場合とありますが又両方からくる場合もあります。乳児や二・三才の幼児は年長児に比して両方が重なり合つてくる場合の方が多いものです。又、両者の区別がはっきりしないものもあります。こんな場合の子供の取り扱いは非常に難しく只教養の方面の保育だけでは満足を得られないこと、なります。いづれにしても、脳神経系領域の問題で、医学的にも心理学的にも未

開拓の部分なのでその治療が困難なのであります。

元来、子供はちつとしていないものです。それは未だ脳神経の働きが不完全で、外からの刺激にも、身体の内からの刺激にも極めて影響され易く、少しのことで心理作用や反射作用が動ようし、従つて動作も変化し易いためです。それ故、普通は脳髓に特別に病変がない限り大人になるに従つて、だん／＼普通になるのがあたりまえなのであります。

しかし、親に梅毒があつたり、大酒呑みであつたり、脳膜炎の如き病氣にかゝつたり、或いは近頃、問題にされているように、妊娠第二カ月末から三カ月初め頃の発生学上、臓器形成期とよばれる期間に、もし母親が風疹のようなウィルス性疾患にかゝると生れてくる子が精神薄弱となつたり、先天性畸形（例えば、三ツ口、多指短指の如き）になり易くそして知能にも欠陥が起ると云われています。このような子は落ちつきがなく注意力が散漫となり、或いは疳が強く、大人となつても、なか／＼治りません。このような子は落ちつきがないというばかりでなくその他にもいろいろの大きな難しい問題があるのですから特別の注意が肝心です。そして早く特別の治療と保育をすれば、よし、知能は遅れていてもそれなりに社会生活が出来るように成長しますし、従つて大人になつても家庭や社会に迷惑をかける度合が少くなるわけです。

又、(三)(四)に述べたようなものは、一種の「ノイローゼ」(神経症)といわれるもので、これは梅毒や脳膜炎や小児麻痺の後に起るような脳髓に器質的障害があるのではなく、官能性のものです。神経衰弱、ヒステリーなどというもの、部類で、これにもいろいろ

の種類があります。

前述の(三)の如く、絶えず眼をパチ／＼させたり、指先きを小さきさまに動かしたり、ある同一の筋領域にくる逡れん性不随意運動で、これを「チック症」といっています。これは睡眠時には休止しています。この病気は案外多いもので、その部位や程度はいろいろですがこれも一見落ちつきがないようにみえます。多くは家庭に不調和や環境に異常のことを発見します。暗示や催眠術をかけたリ電気をかけたりします。例えば肩を動かす場合にはそこに電気をかけてだん／＼部位を移動させ指先きから追い出して／＼というような方法などをとります。

又、(五)のようなものは鉛の慢性中毒によって起る逡れん性素質で、これは現代の医学では治療困難です。ペンキ職の子、印刷所の鉛活字拾いの子、あんま膏(基剤に酸化鉛含有)の製造内職の子など鉛を取扱う母親の乳幼児に起ります。これは十数年前、京都で合鉛白粉(ばっちり、壺おしろい)を使って濃厚化粧している母親の乳児に所謂脳膜炎の多いことよって発見された有名な病気であります。今は合鉛白粉は禁止されて市販はないが鉛取扱業者の家庭に稀に発見されます。この鉛中毒による脳膜炎は一種の血液毒によるのですからビタミンCの補給、肝臓食、肝臓製剤などを与えるのですが一度重くなると全治は困難で、幾分、軽快しても抵抗力が弱いため他の病気で死亡する場合があります。

また、(六)のようなものを「憤怒癲癇症」といい、(七)を、「夜驚症」といいます。これらも一種のノイローゼなので、後述のように、かゝり易い素質の上に栄養の不適當、住居衣服の不良、環

境の異常などいろいろの原因によって起り、多くは年令が進み、抵抗力が強くなるに従って現われなくなるのですが、それでも、最も大切な発育の時期に起るので、将来、精神生活に少なからず影響を残すものと思われれます。

また、離乳が遅れると神経質となりますがこれは生後五カ月頃となると、母乳のみですと量的には十分としても、質的に栄養成分、(鉄、磷、カルシウム、各種のビタミンなど)が不足するようになります。即ち水ばい食物を食べているのと同じです。元来これらの成分は胎内生活のときに母の血液中より摂って肝臓其他の臓器に貯えておいたのですがこの頃になると用いはたして母乳中のものだけでは不足となり、一種の栄養失調を起し、貧血、筋肉がブヨ／＼となり神経質となってイラ／＼するようになり、体重の増加も少くなります。呑竜さまの御厄介になるのもこの頃です、それ故、母乳以外にこれらの成分を含んでいる食物例えば人参、青野菜、白菜、卵黄、レーバーの如きを消化し易く調理して、少量よりだん／＼増加しながら十分与えることが必要なのです。そして母乳を止めても発育に必要なだけの食餌を食べられるようになったとき断乳するのですがその時期を大体一年から一年二、三カ月を目標とするのが理想的であり、もし遅れると前述のような神経質の子供となり、よし全く断乳してもつゞいて幼児期にも神経質となり異常な性質を残すことが慮々あります。離乳の時期と方法が不適當であるために、身体的精神的両方面に大きな影響を与えていることを、一般が十分に認識しておらないことは重大な保健問題と思えます。

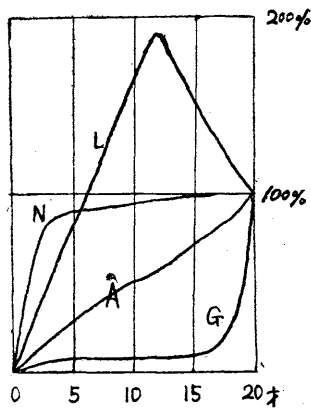
また、腸寄生虫殊に蛔虫症のときも神経質となります。戦後余り

に蛔虫が蔓延したために生後間もない乳児から蛔虫排出をみることに稀れではありません。ましてや離乳期の頃となればしばしばです。幼児期に至っては検便しても確実に証明出来ない場合もありますから隔月位に駆虫剤を与える方が賢明であるとさえ考えています。十二指腸虫も案外多いもので、ある地方では蛔虫寄生率と余り変りない位です。今迄、十二指腸虫が少いと思っていたのは蛔虫の如く普通塗末標本では検出困難で、飽和食塩水浮遊法によると以前よりもっと高率を示します。それ故、神経質や、落ちつきがなくなつたときは念のため駆虫剤を与えてみる必要があります。

又、直接、脳神経に欠陥がなくとも、身体が生れつき弱いとか、生れて間もなく重い病気にかゝつたとか、乳離れが大へん遅れたとか、食べ物の好き嫌いが強いとか、蛔虫や十二指腸虫にかゝつているとか、兎に角、身体に異常があつたり、或いは住居の環境衛生が悪く、例えば冬、アパートの北側に住んで乳幼児に十分日光を当てないとか、万年床の習慣のところ、赤坊を「えじこ」に入ればなしにするとか、工場地帯で煤煙が多く空気が濁っていると、炭火石油こんろを使用しているとか、都会地のそら音になやまされているとかいろいろの悪い住居や衣服の影響によつてだん／＼神経質となり遂には落ちつきがなくなることがよくあります。

それでは、このようなことが何故その原因となるかという点、元来、私共人間の発育は大体、二十二、三才で完成されるものと云われていますが、その身体の中のいろいろの生理的器官は各々その発育の速度が違い、あるものは早くあるものは極めて遅くなどその速度に差があります。最も早いのは脳神経系統で、最も遅いのは生殖

各生理的器官の
発育速度



- N.....脳神経系
- L.....淋巴腺系
- A.....筋・骨其他一般系
- G.....生殖系

器系統です。淋巴腺系統は十二才の頃却つて過じょうに発育しその後、だん／＼小さくなり二十才頃になって漸く普通の大きくなるのです。それ故、例えば、一度大きくなった胸腺が仲々小さくならず残ると所謂胸腺淋巴性体質といつて特異の体質となります。扁桃腺が小学校過ぎると自然と小さくなり摘出手術が不要となるのも、その理由によるのです。脳髓などは生後は約三五〇瓦ですが(大人の四分の一)五才で已に大人の脳重さと同じの一四〇〇瓦にもなります。ですから、このように急速に発育する乳幼児時期のいろいろの心身の環境がどんなに大きく強く脳髓の発育に影響するか想像に余りがあります。そして、私共の知能や性格もやはり脳髓の作用なのですから、急速に発育する未熟の乳幼児期に、身体的には勿論、精神的にも良い影響を与えなければそれが少年期、青年期続いて成人期に迄つきまとしてゆくことは当然でありましょう。それ故落ちつきのない子の中には一見、身体は大へん丈夫そうに

見え、元気で身体をもてあましているようなのがありますが、よく観察すると、案外神経質で過敏質のものが多くあります。そのため蕁麻疹や湿疹が出来易く、又おねしょの癖があったり、夢をみやすかったり、はしゃぎやであったり、内べんけいであったりします。

こんな子供の家庭は心理学者がよくいうところの「不調和の家庭」であることが多いものです。即ち、「甘すぎる家庭」「きびし過ぎる家庭」「放りばなしの家庭」「不和な家庭」「ざわ／＼した家庭」などです。例えば両親の一方が大へん神経質であるとか、おばあさん子であるとか、未っ子であるとか、一人っ子であるとか、女ばかりの同胞中の男の子であるとかは最も問題となります。

また、その他、不良の住宅や好ましくない環境のため例えば住い
がさわがしい繁華街であるとか、その家の職業によって一日中や
ましく、少しも落ちついた気分になれず、熟睡もできない、或いは
蚤や蚊、蠅に攻められるというようなことは同じような理由で乳幼
児は常に強い刺戟を受けて、知らず知らずのうちに、落ちつきがな
くなり神経質とならざるを得ません。

以上、落ちつきのないようになる原因や誘因について述べてみま
したが、このような子をよく調べるとそのどれかにあてはまるでし
ょう。或いはその幾つかが重り合っている場合もあります。即ち、
前述の如く、元来、子供は落ちつきのないのが普通なのですが、生
れつきその傾向の強い、神経質の子供が、身体的障害、家庭の不調
和、或いは住居、衣服、食物など環境衛生上の異常などによってそ
れが刺戟され、強く現われてくると考えてよいのです。

それ故、疳が強いとか、落ちつきがないというばかりでなく、い

ら／＼の悪い性格を予防し、すなおなよい性質に導き育てるには、
妊娠中の母性の健康から始め、生れた後は早くより正しい合理的科
学的の育て方を実行することが第一です。殊に小児急性伝染病の予
防接種、離乳期栄養の時期と方法を誤らぬようにすること寄生虫の
駆除など実行のできることです。そして、このような性質の強くな
らない中に、その家庭の事情に依じて、乳児は乳児なりに、乳児は
乳児なりの「しつけ」や鍛錬が必要です。例えば、授乳時間を合理
的に守るとか、食事やお八つを正しく与えるとか、好き嫌いさせな
いとか、寝る時間起る時間を定めるとか、夏は午睡を励行するとか
冬でも寝衣を着換える習慣、授乳後は必ず便通させるくせ、おしめ
を常に清潔にしておくとか、食前の手洗いなど所謂乳幼児の基本的
良習慣をつけておくことが何より肝要なのです。

已に、神経質の子とか、落ちつきのない子供に対しては年令によ
って、よくその原因を身体的と精神的の両方面から確かめることが
必要ですが、その原因が極めて複雑な場合が多いものですから、こ
んがらかった結び目をときほぐすように、それを一つ一つ根気よく
ほぐしてゆかねばいけません。そうすれば器質的障害のない限り年
令のすゝむに従って、却って、落ちついた活潑なよい子になるもの
です。よし、遺伝的にそのような悪い性質が幾分あったとしても、
生後の環境や教育が良いならば必ずその悪い性質もある程度押さえ
つけられてそれ以上大きくならず、かくされて現れない場合すらあ
ります。これは身体的にも、精神的にもいふことができます。

(恩賜財団母子愛育会福祉部長・医博)

幼児の知能検査の問題



村山貞雄

一、幼児期と知能検査の目標

人生の春という、まず青春期が考えられるが青春期とともに幼児期もまた人生の春といえる。ただし幼児期は青春にたいして緑という字をつけたような感じのする春ではあるが、この両者はともに人間の春であることに変わりはない。これを一年間に比べてみると新年などのように新春という頃は幼児期にあたり、四季のうち春は青春期にあたるような感じがするのもしろい符合といえよう。実際に、幼児期と青年期は心理的に非常に似た点が多い(また児童期と壮年期と似た点が多い)ところが、この両者に非常に変わった点がある。それは、知能が一方は発達^{はつた}の最初であり一方は発達^{はつた}の終りであることである。著者の調査(村山式中学用知能検査法)によると、十五才五・六箇月頃で知能検査の結果がほとんど水平になつているから、知能の高い者と低い者による差はあるが、大体青年後期のはじまる頃、すなわち青春期に一応心身が完成すると考えて

よいのではなからうか。そしてここに子孫を残すために必要な性的な感情の活潑な動きが見出されることになるから、さきほどの言葉をさらに推しすすめていうと、幼児期は個体完成の努力の春にあたり、青年期はこの努力が一応終つて社会的な建設や子孫の維持に関する努力の春にあたるということも可能である。なにゆえにこのよらなことを最初にかといふと、幼児期の大部分の知能検査の目的は、主として学習力をみる検査で満足すべきであるし、またそのことが可能であるが、青年期の知能検査は、大学進学適性検査のような特殊の意味をもつたものは除いて、社会的な活動その他の素質的可能性をみるべきものがもっと作製されるべきであると思ふからである。

幼児期の知能検査の結果は、就学以後の知能検査にくらべてよほど恒常性が低い。これは幼児期の知能測定そのものが困難であることにも由来しているが、幼児期の知能検査の目標はむしろ、ここの二年の間の生活指導の資料とする程度にとどめておくことが適当で

あろう。母親のなかには将来の職業指導や進学指導のことまで知りたがり、検査法にもそれにふれることがあるが、これらのことは小学後半期以後に施行される知能検査にまかせ、幼児用知能検査は目標を狭くするほうがよいように考えられる。とくに幼児期には精密検査がいろいろな事情から困難であるから、その必要が大になる。

なお現在東京都内の幼稚園では就学準備のために知能検査がおこなわれているものが多いが、就学可否のためにおこなうのなら効果的であるが、就学練習のためにおこなうことは、爾後の教育をうけもつ学校の科学的指導を妨害することになる。幼稚園も全教育体系から考えて父兄の要求に屈服しないことが望まれる。

二、幼児用知能検査の方法

学習の素質をみようとする幼児の知能測定はどのような方法でおこなわれるべきであろうか。一番問題になるのは、団体知能検査が可能であるかということである。

団体知能検査が不可能であるという主張の根拠は、(一)団体的な作業のおこなえない幼児が、十分な能力を検査に發揮できないために、その結果算出される知能値が低くなりすぎないかということ(二)不正行為の防止がほとんど不可能であるということではなからうか、少くとも筆者が市販の幼児用団体知能検査を、幼稚園と保育所で団体的に施行してみた結果、以上の二つの点がもっとも大きな難点と考えられた。

ところで、或る幼児が団体検査についてこれられない(のらない)ために、その結果でる知能値が低い場合、どのような不都合が生じ

るのであろうか。知能指数であらわす検査法では、その手段として知能年令を出すのであるが(もちろん知能年令そのものも一つの大きな目的となっている)この知能年令とは、その生活年令の算術平均値である。しかるに団体作業に順応できない幼児はそう多くないから、算術平均値はあまり大きく低下しない。この結果、たとえばこのような幼児が、生活年令六才二箇月で知能年令三才一箇月としても、本当に三才一箇月の生活年令の幼児の平均知能をもっているかということは非常に疑わしい。実際はもう少し高く、したがって知能指数は五十よりは高くなる。このように知能値の信頼性は低いが、もっといけないことは、すべての(筆者はすべてだと思いが、あるいはそうでないものがあるかもしれない)幼児用団体検査法はこのような低年令たとえば三、四才頃以下においては、その標準化に個人検査法を採っている事実である。このような標準化では、団体作業に順応しにくい幼児による影響は零になり、その知能年令の得失は何ら低下していないから、さきほどの幼児の場合、その結果は全く危険なものになり、バイアスを持つことは明かである。要するに、幼児用団体知能検査法の場合、団体作業に順応しにくい幼児このような幼児は一般に知能が低い幼児であるので、知能の低い幼児と考え直しても大差ないが、これらの幼児は、かれらが実際もつ知能年令と知能指数よりかなり低い数値があらわれてくる。(あらわれて来ない検査法があるとすれば、標準化におけるそのような操作の方法を明記しておかなければならないはずである)

以上の、致命的な弱点をのぞくためには、知能偏差値を使えばよい。偏差値法は、平均値からどれ位のへだたりを示すかのみよると

するもので、パーセント法と根本的な変わりはないから、知能の低い幼児が団体作業に順応しにくくても、そのような幼児がおればそれだけ、標準化の場合に各生活年令の知能の標準差が大になるから、このような知能偏差値であらわされた知能値は正しい。すなわち、知能指数よりも知能偏差値であらわす方がよい。それに知能偏差値を出そうとする標準化は、団体検査の対称とする生活年令、換言すれば団体検査の可能な年令よりも下の年令を参考調査する必要は少しもないから、すべての標準化を団体検査でおこないうる、すなわち、当該検査法が採用する方法と同じ形式で標準化がおこなわれる。

しかし、この場合も難点がない訳ではない。それは、いわゆる一般知能のようなものを考えると、同じ程度の知能のA B二人の幼児が、一人は団体作業に順応しにくく、一人はしやすい場合に、この二人のあいだにその性質のために、差があらわれ、知能偏差値も変わってくるという問題である。この事実は大したかゝり、筆者も幼児期の団体知能検査の結果にたいする信頼度のなかに、この意味の頼りなさを始終考慮にいれなければならないことを強調したい。しかし、幼児期の知能検査は、この文章のはじめに述べたように、学習訓練の基礎資料として施行されることが主目的であり、とくに団体知能検査は、幼稚園や保育所で保育上の必要からおこなうもので、幼稚園や保育所では団体作業もしばしばおこない、これができることが学習効果もあがるものになることが多い。ゆえに、知能検査の場合に団体的作業に順応しにくいことは、教育心理学的に考えると低い知能値としても、致命的な欠点にはならない。むしろ、或る場

合のごときは、個人検査法で施行された結果よりも、適当な団体検査法で施行された結果のほうが、幼稚園や保育所で必要とする正しい学習の基礎的能力に近い値を出していることさえ考えうるのである。

しかし、このことは、もちろん適当な団体検査をおこなうことを前提としてのみ言えることであって、無制限に以上の論をおし進めることはまことに危険である。それでは、適当な団体検査法とはいかなるものかという点と、第一に、時間制限検査がほとんど或いはまったくないこと、第二に一度に行う被検査者の人員が五人以下（三人以下が理想、検査補助員がおれば五人よりも少し増してもよい。年令によって多少の差をつけるほうがよい。）にとどめ、その人員も規定してあること、一度の検査があまり長時間にわたらぬこと、などである。

以上で、幼児期における団体検査の施行法に関して最も重要であると思われる点について述べたのであるが、最初に述べたように、いま一つの難点である不正行為の問題がある。不正行為といっても幼児は、他人の作業結果をみるだけでなく、他人に自分の結果を教えてやる者もあり、幼児にこれらのことを、あまり悪いことだと言つてやめさせるのは問題があるし、事実不可能に近い。これには特別の工夫を要するものである。このことについては、近いうちに稿をあらためてその方法について筆者の考察を述べたく思う。

三、知能検査の測定内容

一般におこなわれている幼児の知能検査の測定内容は一般知能で

ある。現行幼児用検査は団体検査法も個人検査法も共に一般知能を測定することを主目的としているが、副次的な目的として他の内容も考えられており、幼児の父兄の希望はさらに一そう診断的な内容を欲しているのが現状である。副次的な目的としては、感官知覚・身体運動・社会性・学習・精神的生産・材料処理(愛育研究所精神発達検査)や、自我意識・注意力・記憶力・推理力・比較力・定義力・計算力・分別力・概括力(村山式就学適性検査法)や、注意力・記憶力・思考力(村山式小学前期用団体知能検査法)や、その他のものがあるが、これらの内容は診断的な目的を相当含むものであるから、心理学的な観点のほかに教育学的(保育学的)な観点を加味すべきであろう。ただこれらの診断的内容は、幼児の知能検査そのものが長時間の施行が不適當であること(四十分以上連続することとは好ましくない)から、プロフィールのような形式であらわされやすい。すなわち知能検査の一部分にあたる副次的目的は、各種知能偏差値や各種知能指数のような形式で結果をあらわしうるだけの段階差をもたすことは不可能であるから、このことはやむをえないが実際に保育に役立てうるだけの精密さが必要であると考えられる。

知能検査の測定内容として、知能と知識内容の問題も、今後ふたたびむしかえされる可能性がある。ウェックスラの知能検査法などのように、知能検査の内容として知識が明かに入れられているものが認められるようになったが、筆者は、知能検査と知的問題の検査(測定)は区別されなければならないと考える。日本保育学会の共同研究として、現在進行中の「幼児の発達基準の設定」において知的問題として、読むこと、書くこと、数えること、常識(数)に関

するもの、自我に関するもの、学習に関するもの、生活に関するもの、記憶、思索などの項目が調査されているが、これらの問題の具体的な内容はいずれも学習効果が大きなものであり、なるべく学習効果のすくないもの(すなわち素質)をはかろうとする知能検査の問題とは混同できない一線が感じられる。

なおこの問題は学問的な論争のほかに、幼児の父兄に正しい認識をさせることが必要である。すなわち教育相談に来る母親の二、三、十％は、家庭で知能検査問題を練習して来て、その結果知能指数があがると知能があがったという信念のようなものをもって、ちよっとの説明ではなかく動きそうにない。多くの父兄はたとえば視力表を幼児に暗記させて視力があがったと思いまちがいをしてるのであるが、このなかには学問的に多少そういうこともあり得るのではなからうかという疑問が存在しているうえに、近時積極的に知能を高くすることを主張する一派の学者が生じたこと、この問題をさらに一そうむずかしくしている。

四、知能検査の利用

近頃、幼児期にも知能検査がおこなわれるようになったが、上級学校にくらべて知的学習が比較的少い幼稚園や保育所にも知能検査は非常に有効である。と思われる。

その理由は、乱暴とか団体行動ができないとか、衝動的とか、社会性がすくないほど、幼稚園や保育所にきわめて重要ないろ／＼の行動情緒社会性技術等の指導も知能検査をしてみて、知能が低いことに原因している場合(この極度の場合が精神薄弱の場合)と、知

能の欠陥に原因していない場合では、指導の方法が全く異なっているからである。しかも幼稚園教諭や保育所保育母の観察による幼児の知能程度の判定は、時折いちじるしくまちがっていることがあるのが事実である。このことは筆者が、教育相談において幼稚園等から知能がいちじるしく低いから診てもらおうようにと言われて母親が連れて来た幼児が全く主訴に反することを時折経験するからである。

最後に、知能検査の結果の利用で、あらたに問題として強調したいことは、現行知能検査法の知能指数等に関して検討を要することである。ただし、これらの検査を同一幼児に多数施行した場合知能値に相当な差が生じるが、これはおそらく標準化の偏りによるものである。筆者は本年六大都市市町村を一つづつ選んで満四歳以上の全幼児（ただし六大都市のみは一部幼児）に同一知能検査を施行して差を出してみたところ、相当な差がでているが、これらのことをもってしても東京や大阪のみで標準化したものは、それがいかによく標準化されていても全国平均からおおよそ遠いものであることが推察できる。そして現在の状態では幼稚園や保育所では信用できる程度以上に知能検査の結果でる教値を信用しすぎている危懼を感じる。

（日本女子大学助教）

○保育科 三〇名（幼稚園教諭二級普通免
許状授与）

○願書受付 一月十日より三月二十日まで

○試験科目 国語・音楽・体育・口答試問

宝仙學園短期大學 募集生

○寄宿舎完備

本学園は都心には稀れな緑林に囲まれた数千坪の校地を有し、高等学校、中学校、小学校、及感応幼稚園を経営する総合学園です。新宿より、都バス、都電にて、五分、国電東中野駅より徒歩十分、交通は至便です

東京都中野区宮前町四六

電中野(38) 三五一一番

新しい保育者のために

鈴木 豊 藏

新しく保育者となられる方々は、その職場で出合う色々の問題について、悩み迷うことであろう。それ等の問題について、穩健中正な立場から、なるべく新鮮な時代感覚をもって読き、それ等の方々が職場で迷わないように案内したいという念願から書いて見たのであるが、紙面の都合もあり、すべての点を尽し得ない憾みがある。

折角縁があつて保育者となつても、現在の制度や経済状態、その他の関係などからその園長や運営の主体となつていられる方々は、なかなか計画的に指導して戴けないのが実状なのです。然しそれでは、新しい先生方は、野放しはされたと同じで、偶然に園で出合う問題について、自然発生経験を重ねて行くに過ぎないという結果に陥つて仕舞う。このささやかな企てが、それ等の方々に、幾分でもお役に立つ点があったら幸いである。

一、自らの正しいオリエンテーション

あなたが、新任の保育者として行った時は、丁度知らない土地の駅で下車したと同

じような関係におかれ、逢う人すべて知らない人許り、西も東もわからないのである。その新しい環境の景観の中で、先づ自らのオリエンテーションをすることが大切である。即ちその環境の中で、正しい自分の位置づけをし、関係者と親しみ楽しんで生活が出来るようになることである。

園の位置、交通機関の関係、園の規模、建物の状態など、外観上の位置づけをすることは勿論、殊に最も心を配らなければならぬのは、人的関係である。園長を始め主事や主任の方、その他の先生方、調理婦小使さん、子供たち、皆初対面の方々許りであつて何れの方からも好奇心の眼をもつて見られるであらうし、自分もまた色々の第一印象を得られる。それ等の方々の間にあつて、どのように自分のオリエンテーションをしたらよいか、そしてどのような方針と態度をもつて進んだらよいか、それが適正であるか否かは、将来に大きな影響をもたらすことになるので、極めて大切なことである。

二、むづかしい同僚間の関係

園長や主事さん、若い先生や中堅の先生未婚の方や子供のいる方など、人的關係は誠に種々雑多で、社会の縮図のようなものである。それ等の方々と緊密なチームワークをとってお互に力となり合いながら保育の効果を最大限に高めて行かなくてはならない。若し、お互の間にトラブルがあることになる、お互に精神的エネルギーを浪費し、相殺し合うことになって仕舞う。

ところが、この大切な職員間の折合いはなかなかむづかしい問題なのである。殊に女の方は感情が細かに、而も鋭く忖くから一層むづかしい。如何にも親切らしい態度で、職員間のことなどについて、色々教えて呉れる人がある。『園長や主任保母は、あんなこと知っているけれども、実はね……』と。あなたは、世の中の表裏の見惜さや、世知辛さを感じ始めるかも知れない。親切心から色々入れ知恵されても、一応冷静に耳に入れておく程度にして、すべては自分の先入主のない曇りのない眼で直接に見、直接に聞くようにすべきである。

一知半解の不和雷同や、真相を確めないで、悲憤慷慨したりすると、必ず後で後悔

する時が来る。また、子供等の仲間、自然に發生するグループがあるように、職員間にも何かの共通点などから、グループが出来ていることに気付くであろうし、同僚からは、その何れかに入ることと促されるであろう。勿論自分の好きなグループに入することは結構である。ただ一つ注意しなければならぬことは、そのグループが、自然發生的に出来たものなら、何の不思議もないが、それが交友とか社交とかの範圍を脱して、一種の政治的運動にまで進むようになる、と弊害が伴い易いものだけということである。グループ相互の勢力争いの渦中に入ったり、一部野心家の手先きに使われたりしてはならない。正しい道を歩まないの程自分等の勢力を強くしようとあせり、新しく入った者に、あれこれと手を尽して、自分の味方に引き入れようと、誘惑の手を伸ばして来るものである。

そんな場合に対処する方法は、なかなかむづかしいが、軽々しく同調すべきではない。自分の曇りのない眼で、公平に情勢を見、純真無垢の感覚と、聰明な判断力とをもって、独自の立場を堅持するがよい。そして

若し出来ることなら、あなたの力が、そうした醜い図形を解いて、豊かな趣味と真摯な研究心によって、なごやかな図形を再組織する原動力となることが望ましい。

保育者としての生涯は、最初におかれた同僚關係の図形の如何によって、或る程度方向づけられるといわれる位であるから、ここは一つ、賢明な態度をもって慎重に考えて、善処しなければならぬ。混沌とした変転の激しい社会にあっても、せめて教育に關係をもつ社会だけは、正しいものが正しいとされ、真理が真理として認められしかも寛容で自由な社会にしたいものである。その源泉となるものは、何と云っても職員室のモラルから来る場合が多いことを銘記して貰いたい。

三、保育者の苦しみと楽しみ

家庭では一人の子供を育てるのに、容易でない苦勞をしている。保育者は、この小さいお子さん方を大勢お預りして、自分の責任において立派に保育しなければならぬのであるから、その苦勞はなみ大抵なものではない。しかもこの子供達は、一人一

人かけ替えない大切な人様の子供なのである。若し間違いがあつたら、何とも申訳がないし、どんな方法をとつても償いの道がない。従つて少しの油断も障もない勤めとなるわけである。

殊に児童福祉施設の保母さん方は、朝早くから夕方遅くまで、一切母代りとなつておむつのお世話から、大小便の始末、給食のお世話、病氣になつた時の看護、さては交通事故の心配まで、心もからだも少しのゆるみもない。その間に保育の目指す、子供の心身の調和的発達を企図する、積極的な努力をして行かなくてはならないのである。その苦勞の容易でないことと、その責任の重大さから、今更の感を起して、保母の使命感に燃え、可憐な子供たちのために献身努力しようとの決心も怪しくなり、保母としての信念さえ失うようなことがないとはいえない。然し、それも日を重ねるに従つて慣れて来るし、だんだん保育技術のこつを覚えると、案外苦勞は薄らいで来るものである。のみならず、子供に対して何ともいえない愛情が湧いて来る。やんちゃ坊主であらうと、頭の足りない子供であら

うと、本当に可愛いくなつてき、子供もなついで来て、先生を親のように、いや場合によっては親以上に尊敬し信頼してくる。そこに苦勞を苦勞と思わず、愛する子供のために、一切を捧げ尽そうとの勇氣が湧いてくるものである。子供は小さい時、お世話になつた先生は、大きくなつても忘れることはない。先生としての楽しみは子供時代に教えたやんちゃ坊主が、一かどの立派なものに成人して、社会に貢献している姿を見、又その消息を知ることである。そして教育者としての生命は、教え子を通して永遠に社会に生きて行く。物質的に恵まれることが薄く、苦勞がどんなに多くとも、いうにいわれぬ楽しみを味い得るのは、教育者のみのもつ特権である。

四、子供への愛情

前にも申したように、子供は可愛いものである。愛のない所に教育はなく、愛は人を導く原動力である。然し、その愛情は、教育的に正しいものでなくてはならない。よくいわれる盲愛とか、溺愛とか、偏愛などに陥ることは保育者として厳に慎まな

くはならない。子供の服装や容貌、賢愚などによって、愛情に厚薄が出来たり、家庭の貧富や、親の地位、門地等によって、愛情に差が生ずるようでは、正しい教育愛とはいわれない。こころした愛は自然的感情の好き嫌いであつて、教育上の愛とは凡そかけ離れたものであり、寧ろその逆なものである。「人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」

といわれ、児童憲章には、「児童は人として尊ばれる」と示されている。すべての児童は人として平等に愛され、尊ばれ、保護育成されなければならない。偏りのない正しい愛情こそ、人を導く者の持つべき第一の資格である。ところが、偏りのない正しい愛情を、すべての子供に持つということは、口では簡単であるが、事實はなかなか容易なことではない。実に難事中の難事であつて、人を導く者に課せられた永遠の課題である。この課題解決のために、お互に修養し努力して行こうではないか。

五、子供の世界を知れ

幼児は、その身体的発達の間からも、精

神的发展の面からも、大人と違った特殊の世界に生きて居りかけ替えのない生活内容を持って居る。大人の世界と幼児の世界は、量的相違だけでなく、質的相違なのである。だから大人を縮小したものが子供ではない。子供は、物の見方や考え方、理解の仕方が大人とは違って居り、興味や欲求の中心点が違う。時計の振子が「おいでおいでをして居る」と思ったり、りんごの皮をむけば痛い痛いと思ったり、虹に乗って天に昇ることも出来ると思っている。実に捉われない自由奔放の想像の世界を展開しているのである。だから子供が一生懸命何かやっている時、大人から見ると、一体何をやっているのか解らないことが多い。保育者は、この子供の目的、子供の心を汲みとってその考えを發展させ、子供の心の成長を図ってやらなければならない。そのためには、児童心理学を研究し、その生活の実態を観察し実験し、子供から学びとることが大切である。子供の地位に身を下して、子供の世界に入り込み、子供と同じに感じ同じに考える本当のお友達になるこ

とが出来て、始めて立派な保育者として子供を引張って行くことが出来るのである。そのためには、子供のようにならなければならぬ。持ち続け、明朗にして快活、生き生きとした態度を持つていなければならない。

六、学理と経験との関係

学理は、過去数百年乃至数千年に亘って数知れない多くの人々が、経験し研究したものを累積し、合理的系統的に組織された貴重な文化財である。われわれは、この先輩の遺産を受け継ぎ、更に経験を重ね、創造力を働かして、より高次の文化財として、次代に引き継ぐべき責任がある。かくして社会の進歩発達が見られる。だから、学理は、われわれの進路を導く羅針盤ともいべき權威あるものである。けれども学理は普遍的な理論であって、いつ如何なる場合、いかなる者にも、しつくり適用されるものとは限らない。その理論を、現実の実態に即して、適用を誤らないようにするのが、保育者その人の技倆である。ことに経験の尊さがある。

然しながら、自分が単なる永い経験があ

るからといって、それを鼻にかけ、何でも自分の経験から割り出さうと考えたり、また困ったことは、何でも経験年数の長い人に尋ねれば、すべては解決すると考えて、理論的研究を軽視するような態度はよくない。個人の経験は、永いといっても、歴史的に見れば極めて短いものであり、なお、そこには個人的偏見も伴い易く、多くは普遍妥当性を欠くものである。また歴史的に見て、過去における先輩の失敗を繰返しているかも知れない。

以上によって、理論と経験の何れを軽視する態度も、適当でないことが判ったと思うが、何れかといえは、自分の技倆において、理論の示す所に従うのが無難だと思ふ。然しながら、学理に従うといつても、特殊性の豊かな実際の場面に、理論を如何にして適用して行くかという点に、攻究すべき問題がある。そこが、保育者の手腕力量に俟たねばならない点である。

七、研究的態度を失うな

一般には、幼児の保育を子守役位に考えて、研究というようなことは、何の必要も

ないようによく考えられ勝ちである。これは非常な間違ひであることは申すまでもない。

幼児期の特質や、生涯を支配する性格形成の基礎が培われるこの時期の子供を、如何に導いたらよいかということは、誠にむづかしい問題で、余程しつかりした研究をしてからならなければならない。保育の目的

とその内容、幼児の個性問題、保育の理論とカリキュラムの問題、幼児の心身発達の研究、知能や性格の検査法、精神衛生学、異常児の心理学、どこまで研究しても研究し

尽せるものではない。その上保育の効果をあげるためには、父兄の指導にまで手を伸ばさなければならない。

進みつつある者のみが、人を導く権利があるといわれるが日々に新たに、一步一步前進の過程を辿って、始めて新時代の知識と感覚をもった保育者となることが出来るのである。

ところが、幾年か勤務している間に、いつしかマンネリズムに陥り、その日暮しになり易い。殊に女性の方は、家庭婦人になると色々家庭的煩わしさが加わって、保育に対する情熱も薄らぎ、研究からも遠ざか

り勝ちである。若い保育者は、今から覚悟して、いつまでも潑刺とした若さと情熱とを失わず、永く研究的態度を持ち続けるようになりたいものである。

八、服務上の心得

堅苦しいことをいうようであるが、保育者も公務員に準ずる務めに従事するものであるから、勤務上の態度が立派であると同時に、子供や父兄の尊敬と信頼受けるにふさわしい人格、円満な常識を具えて居たいものである。

職務に対しては、強い責任感をもち、誠実をもって一貫しなければならぬ。行き届いた保育の仕方は勿論だが、職員間の融和と協調、来客の応接、電話のかけ方等まで抜け目のない勤め振りを発揮することが大切である。超然と高くとまつて、上席の方々の指図によつてのみ動くというようなら、消極的創意性に欠けた態度は憚しみたい。

殊にその園で定めた、服務上の内規というようなものによく承知して、それを実践に移すことを忘れてはならない。朝の出勤から、出勤後になすべきこと、遅参・

早退・外出・退勤の仕方から、欠勤・旅行などの手続き、当直制度や慶弔に関するきまり、今までの慣例など、単に自分の常識だけで処理することの出来ない事柄が沢山ある。それらを知らないために、だらしないとか非常識などと、思わぬ誤解を招くようなことがある。誠につまらないことである。若し成文になった内規があるならそれをお借りして見て置くがよい。

次に服装その他について一言したい。保育者は、健康に満ち満ちた溢る、元氣と明朗さを持ち、ほんばんはずむむむのようでありたい。同時に、服装にも注意して容姿は端正にして居たいものである。

服装は派手なものでなく、さっぱりとした清潔なもので、出来るなら調和のとれた活動的なものを、きちんと身につける。いつも子供や父兄の目標となるものであるから、言葉遣いや礼儀作法にも注意し、教養ある者としての態度と、氣品とを失いたくない。子供は、親の鏡であると同時に、父母の鏡でもある。保育者の人格は、そのまま子供に反映するものだからである。

(福島県立高等保母学院)

この子供たち

(8)

イーデイス・ウォートン作
松原至大訳

父母の手を逃がれて

「あの子に、ゆうべ手紙を書きましたよ。ボインは、翌日セラーズに、こう言った。自分が手紙を出すのに、こうして言いわけをしなければならぬかと思うと、やりきれなかった。だが、セラーズは、次ぎのように答えて、ボインを安心させた。「まあ、うれしゅうございますわ。私たち二人が、ここにこうして、幸福に暮しておりますので、あなたの小さなお友だちが、のけものにされるのかと思いますと、私、いやでございました。」

これは寛大な心だなと、ボインは思つて、セラーズが好ましかつた。その度、ボインは、山をおりて、いっしょに食事に行かないかと誘つた。それも、ボインの地味なホテルではなくて、山荘の下の松林の中にある「パレス」へであつた。大きなレストランのはなやかさが、山荘での生活と対照されて、セラーズを喜ばせるであらうと思つたからである。

二人は食事を終えて、広いホールの一隅でコーヒーを飲んでゐた。ボインは、ここに来てから、初めてセラーズを同じような美しいレディーたちの間でながめたのである。そしてかの女のように気品を持った婦人が、ほかにいないのをうれしく思つた。給仕頭に言いつけた上等のシガレットの香につつまれながら、セラーズが語る観察と批評とを、楽しそうに聞いていた。

「あの柱のそばにいる娘さん、かわい、じゃありませんか。でも、『ヴォーグ』や『テトラ』で、よく見る顔ですわね。」

マーティンさん、美人も標準に合わされてしまったら、つまりませんわねえ」

ボインも、もう今日では、あり方が、そうなっているのだと思っていた。そしてセラーズの持っている最も大きな魅力は、かの女が、まだ婦人というものが、個性の美しさを持つていた過去の時代に属しているからであると、ひそかに思っていた。

「もしぼくが、ああいう新しい型の美人を女房にしたら、人ごみの中では、いつだって見わけがつかないでしょう」ボインはこういって、賛意を表した。セラーズは、満足そうに笑った。それから眼鏡をあげて、ホールを見廻してから、

「あの方なら、あなたは……」

「また新しい美人ですか。どれ——」

「美人、いいえ、きれいな方ではありませんが……でも、ちがったところがあります。今入ってきたばかりの娘さん。あら、どこへ行ってしまったのかしら。ああ、ポーターとお話をしています。ああ、こつちを見て……でも、あなたのところからは、見えません。まだ子供くしていますよ。ああ、よい顔」

ボインには、最後の言葉が、ほとんど聞きとれなかった。そこへ、ポーターがきた。

「若い御婦人が、あなたさまにお目にかかりたいと、おっしゃってでございます」

ボインは、人ちがいではないかと思つて、指さされた方を見た。そこに立っているのは、ジュデイス・ホキータであった。地味な旅行服を着て、やせて細そりと、心配そうな目の上に、帽子を深くかぶつていた。いかにも小がらで、くすんだ色の装いをしていたので、腕をあらわに出した派手な婦人たちの中では、全く目につかなかつた。だが、セラーズは、直ぐに目につけたのである。いかにもなにか、ほかの婦人の持っていないものが、ジュデイスにはあつた。ちよとど、セラーズが持つていたと同じように、けれど今は、そんなことを考へている時間がなかつた。一体この子は、どこから来たのか。だれに連れられてきたのであろうか。

「ちよとど待つて下さい。ぼくの知っている娘です」ボインは、ポーターについて、階段口のかげのところに行った。

「やあ、どうして」

「あら、マーティンさん。私、お立ちになった後かと思つて、心配いたしました。」

ボインは、両手でジュディスをおさえた。ジュディスは、小さな顔をあげた。そうだ。どうしていけないのか。ボインは、ヴェニスで別れる時にキスをしたことがあつた。ボインは、ジュディスの頬に、唇をつけた。

「どうしてきたのです。皆、御いっしょ。」

「マーティンさん」こういつて、ジュディスは、しっかりとボインにすがつた。ふるえているのが、わかつた。ジュディスは、ボインの間に答えようともしないで、あたりを見た。

「どこかにライティング・ルームはございません。お食事の後では、そこがあいておりましたよ。」

ボインは、ホールの方の小さい部屋へ、ジュディスを連れて行つた。そこはジュディスが言つたように、机も、長椅子もあいていた。二人はならんで、腰をおろした。

「ああ、マーティンさん、あなたにもうれしいと、おっしゃつて頂きとうございます。」

「うれしいつて。もちろん、ぼくはうれしい。」こういつて、ボインは自分の心を押ししずめた。

「あなたは、疲れていますね。なにか、変わったことでもあつたのですか。お家の方も、ここにきたのですか。」
ジュディスは、ちよつと身体をひいて、まじめな顔になつた。

「父と母のことでしたら、まだヴェニスにおります。私たちが、ここにすることは知りません。マーティンさん、しからないで下さい。私たち、逃げてきましたの。」
「逃げてきた。だれが逃げてきたんです。」

「私たち、みんな。スコープとナニーといっしょに、私たちは、いつかしら逃げ出さなければならぬと、いつも言つていました。スコープと、私とで相談しました。私たちは、丘の下の下宿屋『ローゼングリュウ』にいます。父も母も、私たちがここにいたとは、夢にも思いません。きのうヴェニスに着いたクナグ号で、アメリカへ行つたものと思つています。私は、そのように手紙に書いてきました。テリーは、すばらしい智者です。みんなテリーが、考え出しました。私たちは、ベデューアで自動車をやつて、ここへきました。でも、心配なことには、あの子が、すっかり弱つています。空気がいいから、むき

によくありませんよねえ。』

ジュデイスは、一生懸命に、それでいてもの静かに、初めから終りまでを物語った。あたかも、かの女が語ることは、一つとして別に驚くべきこと、重大なことではないかのようになつた一つ、テリーの健康のことについては、例外であつた。

「マーティンさん、この空気は、よろしいのでしょね。」と、歎願するように言ったので、ポインも、

「こんなよいところは、ほかにありませんよ」と答へなければならなかつた。

それを聞いて、ジュデイスは、いくらか落ちついた。

「ああ、来てよかつた。」こう言つて息をついた。ポインには、かの女が、疲れきつた子供のように思われて、今にも自分の肩によりかかつて、眠つてしまひやしないかと思つた。

「ジュデイスさん、もう十時を過ぎていますよ。なにか食べましたかな。」

「頂きません。時間がなかつたのです。なによりも、子供たちを落ちつかせなければならなかつたし、それに、あなたが、ここにいらつしやるか、どうかも確かめなければなりませんでしたから。」

「お話をする前に、なにか、君は食べなければいけない。」

「ええ。頂きませう。」こういって、ジュデイスは、いつものしつかりした態度にかへつた。

「ここで待つていらつしやい。ぼくが、なにか探してくる。」ポインは、ホールの中にはいつた。そこでは人々が諸所に一団となつて、トランプを始めていた。ポインは、セラーズを、空になつたコーヒーのカップといつしよに、残して来たことに気がついたので、どこにも、セラーズの姿はなかつた。

「ああ、そうか、待ちくたびれて帰つてしまつたのだ。」ポインは、いらだたく思つた。待つていてくれた方が邪気もなく親しみを感ずるのに、かの女は姿をかくした方が、よいと思つたのにちがいない。ポインにとつて今大切なことは、ジュデイスに食べるものを与え下宿屋へ届けることだけであつた。それをすませてから、山荘へかけつけて訳を話せばよいと思つた。給仕を見つけて聞くと、もうおそいので、食事の用意はできなかった。ハムのサンドウィッチとカクテルを、ライティグ・

ルームに持つてくるようにいつけた。カクテルを一口飲むと、ジュディスの血色は、平常の通りになった。自分の分まで、ポインは、ジュディスにやった。

「ああ、これで、みんな、ここに來てしまいました。ジュディスは、ほっとして満足そうに言った。

「チップは」と、ポインは心配になった。

「チップのこと、そうおっしゃると思っていました。私がチップを連れずに少しでもよそへ行けるとお思いになりますの」
「だが、一体、これはどうした訳なんです。あなた方、気でも狂ったのかな」

「気が狂ったのは、父と母です。私は、そんなことでもあれば、逃げだしますって、前からいっていました」

「どんなことが、おこったのです」

「あら、私、おしらせしたと思いますが、でも、手紙が届かなかったのでしょうか。届いていれば、お返事を下さいますわねえ」と、ジュディスは信頼の面持ちで、ポインを見た。ポインはまごついて、どもった。

「さあ、聞かせて下さい」

「なにもかも、こわれてしまいました。私には、前からわかっていました。またこの前のような騒ぎが始まったのです——探偵だの、弁護士だの、母の離別金だのという騒ぎが。マーティンさんは、御存じでございましょう。子供たちがよくいう母の古い友だちのサリー・マナーという人のことを、子供たちは、物心がつくことから母に聞かされていて、なにかいけないことがおこると、母はその人を呼ぶものと、子供たちは思っています」

「で、こじれてしまったのですか」

「今までに、こんなひどいことはありませんでした。父は前から、私たちを分けていました。パンとピーチーはボンデルモントへ。あの人は、お金持ちのアメリカカ女と結婚しましたから。それからジニアは、ジニーをひきとるようになりました。レンチさんは、あの子が、お気に召しているのです。父は、もちろんチップを引きとり、大きい私たち三人は、いつものようにあっちへやられたり、こっちへやられたりすることになりそうです。ちょうどスコップが、ピアリッツの貸出図書館からいつ

も借りてくるぼろ／＼の本のように。つまらない本は、いつまでも借りておけますけれど、面白いのは、一週間しか借りておけません。だから、私、みんなを連れて、逃げ出さないわけには参りませんの。」と燃えるような顔を、ポインの方へ向けた。熱でもあるのではなからうかと、ポインは心配になった。かの女の手をとったが、顔のように熱かった。

「あなたは疲れきっている。あとは明日のことにしましょう。さあ、帽子をかぶって。下宿まで送りましょう。」

「でも、マーティンさん。お約束して下さいね。私たちをいつまでも守って下さるって。」

「安心なさい。スコープの本にかけて誓いますよ。さあ、でかけましょう。でないと、あなたは寝こんでしまう。」

今までに、こんな眠むそりなジュデイスを見たことはなかった。おとなしく帽子をかぶせてもらい。コートを着せてもらって、ランプをしている人たちの間を通過して、夜の大気の中に出た。月が、西の高い峰に、すれ／＼になっていた。二人が、青白い原と、眠った人家との間の道を歩いて行くと、谷の下の家から、十一時四十五分を知らせる時計の音がした。林はずれには、まだ灯が、二つ三つまたたいていた。しかし白い柵の奥に、しかつめらしく引こんでいる「ローゼングリュー」は月光に照らされて、戸がしまっていた。ポインは、庭口の戸をあけると、ジュデイスの前に立って、階段をあがって行った。

「ああ、ベルはならさなくとも、よろしいのです。みんな起きてしまいますから。鍵はかかっていないと思います。私、スコープにいつとききましたから。」ジュデイスは、扉のハンドルをまわした。扉は、しずかに開いた。ジュデイスは向きなおってポインの身体に腕をまわした。

「私、あなたが守って下さらなかつたら、どうしてこうやっておられますよう。」ジュデイスはこう言って、力いっぱい、キスをしようとした。

「それはいけない。」ポインがつぶやいた。そしてやさしく、ジュデイスの腕をほどいた。二杯目のカクテルは、飲ませない方がよかつたと思ひながら。そして

「早くおはいりなさい。あしたの朝、みんなの様子を見に来ますよ。」と言って、扉をしめた。

もう真夜中であった。今頃、あの山荘を訪ねたら、セラーズは、なんとというであろう。ホテルへ帰る途中、左へ折れて、な

れた近路を登って行った。だが、山荘には、もう灯がついていなかった。

あくる朝、ボインは、セラースのところへ行く前に、「ローゼングリュウ」へ行った。ホキータ家の人たちの、奇怪な家出について、もっとくわしいことが知りたかったのである。

門のところ、スコープに出会った。いつもに増して、やせてはいたが、かたい決心が見えていた。灰色の木綿の手袋で、ボインの手を強く握って、あなたのいる間に、ここに來られたのは、天の助けであるといった。ジュディスとテリーは、とても疲れているので、失礼をして、そっとしておく方が、よろしゅうございませうねと聞いた。ほかの子供たちは、朝の食事を終えて、ナニーと子守に付き添われて、谷の上の草原へ遊びに行ったといった。

ボインが聞こうと思ったニュースの重苦しいのにひきかえ、スコープの言葉は軽らかであった。スコープは、落ち着いていた。いつでも危急の場合に出会ふと、そうであった。これまで、あまりにも多くの危機に出会ってきたので、かの女にはそれが、雷雨か、水痘のように、自然的な、また避けがたいもののように思われていたのである。困ったことではあるが、騒いだところで、どうにもならないことであった。それでも決して、事件を軽じてはいなかった。これまでに度々、ジュディスが子供を連れて家出をする、おどかしたことがあったが、

「今度という今度は、物の見事に、それを実行いたしました。スコープは、勝ちほこったように、いかめしくこう言った。だが、実行はしたが、どう解決をつけるのか。これは、ボインが発せずにはおられなかった疑問である。あまりにも、かれらの出発が急であったから、そうしたことに、気がつかなかったことは、スコープも認めなければならなかった。でも、あの時に実行しなければ、二度と機会はなかった。

「マーティンさん、だれだって、二度もあのよう日に会って御らんないまし。私どものお子たちのように。」
細かな話を聞けば聞くほど、さぞやひどかったにちがいないと、ボインは思った。そしてもうジュディスには、くりかえして聞くまいと思った。だが、反抗の第一歩を踏み出した今となって、スコープも、自分たちでやり進せろと思っっているのであろうか。もし見つけられたら、かれ等はどうする覚悟でいるのか。

(つづく)

フレール館の

29年度 新學期用品

☆ 半世紀のけんさんと漸新な企画、良心的な製品で御好評を頂いて参りましたフレール館の保育用品。 ☆
 ☆ 29年度新學期用品も次の通り製作完成を見るにいたりました。優良廉価をモットーといたし、幼児教育の充実と発展の一助ともなることを念願といたして ☆
 ☆ おります。 ☆

◎ 御用命は貴園もよりの本社代理店又は本社へ直接御申しつけ願います。

幼児指導要録 (用紙)	保育日誌 (用紙) A・B	園籍簿 (用紙)	出席簿 (用紙)	身体検査表 (用紙)	卒園台帳 (用紙)	綴込表紙	保育料袋
B5判 4頁 文部省制定様式のもの。	B5判(A)は従来のもので、 (B)は新案の様式です。	B5判	B5判	B5判 文部省制定様式のもの。	B5判	B5判、前記用紙の題字レツテ ルを奉仕いたしました。	特に紙質を吟味しました。 図柄更新。
5.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	50.00	2.50

つうえんブック

A6判
図柄更新。

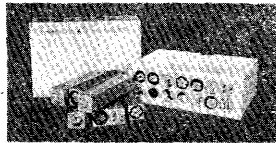
園のたより

内容を改訂左開きに改め、
図柄更新。

出席ゴム印

(1組)

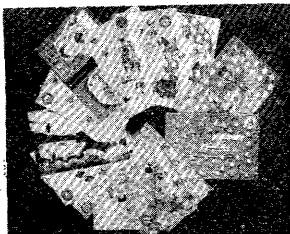
四個ボール箱入
図柄更新。



出席カード

35.00

A5判、キングダーブックに御執筆頂いている黒崎・林・安・木俣・立野・中村諸先生方の美しい絵柄です。



出席カード用貼紙

1箱10人分。美しいシールにしました。

200.00

はさみ

従来のものを更に吟味いたしました。

35.00

- 木園スタ募 | 集 (A) 25.00
- 木園スタ募 | 集 (B) 25.00
- 木園スタ募 | 集 (C) 25.00

(A) (B)

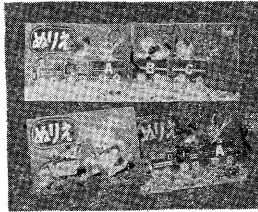


(A) (B) (C)
共にA2判
多色刷新学
期御入園の
よろこびを
たゝえるよ
うな楽しく
美しい図柄
といたしま
した。

大きさはい
づれも約
1.5尺×2尺
幼稚園・保
育所共用。



- ぬりえ (初級) 35.00
- ぬりえ (上級) 35.00



上級・初級共B
5判 16枚 初級
は、描画発達階
を考慮し、上級
は、幼児の創造性
を特に考慮して企
画いたしました。

自由画帳 (A)

A4判 16枚
左開き、図柄更新。

35.00

自由画帳 (B)

B5判 20枚
上開き、図柄更新。

30.00

自由画帳 (C)

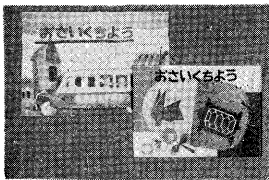
B5判 26枚 左開き、実用向に
製作いたしました。

25.00



- おさいく帳 (大) 35.00
- おさいく帳 (小) 30.00

(大)はA4判、(小)
はB5判、大・小共
鼠色、10枚、黒2枚、
図柄更新。



まんてんくれよん (12色) 60.00
 まんてんくれよん (10色) 50.00
 まんてんくれよん (8色) 40.00

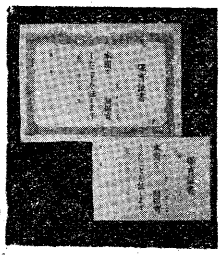
文部省選定標準色準拠。
 日本工業規格品、色彩品質共に十分検討してあります。

お道具箱 (木製) 60.00
 ニス塗、材料を特に吟味いたしました。

お道具箱 (紙製) 35.00
 厚ボール製、角止金つき、手軽く堅牢にできています。

保育証書 (大) 7.00
保育証書 (小) 5.00
 (大)はB4判 図柄更新、紙質を吟味しました。
 (小)はB5判 紙質吟味。

えあそび 40.00
 B5判 16枚 幼児の表現慾をみたくすより及川ふみ先生考案。



楽しいお仕事 (1) 45.00
楽しいお仕事 (2) 45.00
 1・2共B5判 16枚
 及川ふみ先生考案の工作集。



組別名札 (1枚) 2.00
 桜型、赤・黄・緑・水・藤・桃・白・青・橙の9色
紙 (特製5寸) 50.00
紙 (特製4寸) 40.00
 20色、文部省選定標準色準拠。上質紙使用、各色100枚1束。
紙 (並製5寸) 38.00
紙 (並製4寸) 28.00
 20色、文部省選定標準色準拠。各色100枚1束。

幼児の教育 第五三巻 第一号

定価金五十円

昭和二十八年十二月二十五日印刷
 昭和二十九年一月一日発行

東京都中野区千光前町一〇

編集兼 倉橋惣三
 発行者

東京都文京区大塚町三十五
 お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

○本誌御購読についての御注文は発売所
 フレーベル館にお願い致します。